
機動戦士ガンダム SEED Omicidio

さーもそ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム SEED Omicid i o

【Nコード】

N1755M

【作者名】

さーもそ

【あらすじ】

君たちは、何にだってなれる。

幼い時から特殊な教育を受けた結果「殺戮者」と呼ばれた少年少女達の物語。

キャラクターのイラスト等はサイトに <http://0>

4.mbsp.jp/regand0206/

手描きMADも上げております <http://www.y>

outube.com/watch?v=dV88X01hA-Q

与えられた飴（前書き）

本作品は、「機動戦士ガンダムSEED DESTINY」の二次創作小説です。オリジナルキャラクターも登場しますので、苦手な方はご注意ください。

ちなみに、既に携帯サイト（下記にURLあり）の方で完結しておりますが、パソコン用向けという事で、改めて投稿させていただきます。

・>a href="http://04.mbsp.jp/regiond0206/"<さーもそ hearts!>/a<の方にて、詳細なキャラクター解説・イラスト、手描きMADなどありますので、携帯でアクセスの方はこちらでの閲覧を推奨いたします。

与えられた飴

私の自我が目覚めた時、周りには何も無かった。

何か冷たい壁が四方を包み込んでいるような気がする。暗く、ただひたすらに光を貪欲に飲み込んでいく暗黒の空間。

手を伸ばしても、何かに遮られる。

冷たい。

ひんやりとした金属の壁が“成長し続ける彼女の体”に触れる。

最初は辛い事なんて、何も無かった。

だって暗闇以外に私の目に映る物は無かったのだから。

一日に一度ほど、唯一、この漆黒の空間から出られる瞬間があった。

その時に差し出される手、その上には小さなお菓子と飲み物が乗せられていた。これがとれる唯一の食事、これだけが私の人生。

だが、その配給された食事もとある日を過ぎてピタリと止まった。

出たい…！

此処から出たい……！！

必死で私は扉を叩いた。

何時間ドアを死に物狂いで叩いたのだろうか。そのドアを音を立てながらキィと開いた。

その時、私の眼に初めて人の顔が映った。

皆、幼い子供だったのだ。

「……んっ…！」

少し汗ばむ額、その汗の不快感で私は目覚めた。

隣のベッドには私と同じくらいの少女がすやすやと気持ちよさそうに眠っている。

私達がいるこの空間は四方を囲んで鉄格子の壁。これでは以前の暗闇の空間と変わらない。自身の自由を奪われ、閉ざされていることに変わりはない。

「ま、いいか…いずれ私は……」

私は諦めのため息をついて、再び自分のベッドに眠り込もうとする。が、その時

「しけた顔してるね。」

いつの間にか目覚めた隣の少女が私に話しかけてきた。

「え？」

「…出たいと思わないの？ここから？」

「出たいて…？」

「だからここからだよ。」

私には少女の言うことが解らない。もし逃げ出して“研究員”達に捕まったらどうするつもりなのだ？

「…大丈夫なの？」

「だいじょぶだよっ！だから行こっ！外に！」

彼女は執拗に私の手を引いて走り出した。支給されたフォークの先で作ったのであろう鍵でドアをこじ開け、辺りを見渡して真っ直ぐある場所へと向かう。

私と彼女の表情には決定的な差があった。捕まることの恐怖に怯えきった私と、脱走を恐れない笑顔の表情の彼女。

「…お風呂？」

「そう。見て？」

着いた場所は見た目は何の変哲も無いバスルーム。だが、いやに土の香りがする。

彼女はバスルームの床を靴の先でバリバリと剥がした。そこにはぽっかりと穴が開いている。そしてその横には磨り減ったスプーン。

「こっから行くんだよ？こっれ作るのに時間かかったんだからー」

少々自慢げに彼女は誘導する。

真つ暗な闇を私は彼女と二人で進んでいった。

その先にあつたのはまぶしいまでの光。

小さな森の中であつた。二人は座り込む。

まるで不思議の国に迷い込んだみたいだ。

さえずる小鳥の音がすごく心地いい。

様々に染められた自然の色はあそのような灰色の空間より、よほど気分が良い。

「……さつてと。こんな所にいつまでもいてちゃ、捕まっちゃうから……」

彼女は立ち上がり、大きく伸びしてから走り去った。そして、帰り際にこんな事を言っていた。

「死ぬなんか考えちゃだめだよ」と。

彼女の名前は何だっけ……？

「いや、名前なんてどうでも良いものだ……」

薄い金の髪をした女はコンピュータの画面を見ながら呟く。
ディスプレイに移された内容はこうだ。

『ユニウス・セブンは落下軌道に向かっている N・O・T・
には、後の対策のためのザフト艦追撃作戦に向かってもらいたい』

女はパスワードを入力し、返信を打ち込む。

『了解』

「……名前なんて……」

女の名は『シュリア・マード』地球連合軍特別部隊『N・O・
T』所属、階級は中将。

紫と橙の二つの色を持ったオッドアイだ。

殺戮はまだ、始まったばかりである。

秩序と混沌

西暦の時代はとくに終わり、既に73年を数えるようになった新暦“コズミック・イラ”

ほんの40年ほど前からピークを迎えた“ヒトへの遺伝子操作”によって人類は新たな対立を始めたのだ。

受精の段階から遺伝子操作を受けた新人類“コーディネイター”
そして今まで通り旧来の人類“ナチュラル”

コーディネイターは全ての能力段階においてナチュラルを凌駕し、それが原因で彼らは地球各地で迫害を受ける事へとなったのだ。

コーディネイター達はかつての故郷である地球を離れ、宇宙へと向かい、そこで人工コロニー“プラント”を作り上げて安住の地を築き上げたのだ。

無限の宇宙から得られる資源によるエネルギー供給。既に石油資源そのものが枯渇の一途を辿っていた地球にとって、またしてもコーディネイターは脅威の象徴となった。

そしてコズミックイラ70年、“血のバレンタイン”と呼ばれる悲劇によって両者の争いは激化、数で完全に勝っていた地球連合軍もプラントが新たに開発した新兵器：モビルスーツによって苦戦を強いられ、しばらくの間疲弊したままであった。

だが、ついに地球連合軍も新たに自らの手でモビルスーツの開発に成功。一気に反撃を目指し、両軍は宇宙へと上がり、ヤキン・ドゥーエ攻防戦にてついに終戦を迎える。

両者の戦いはこれで終わりかと思われていた。

だが、プラントの一つ“アーモリー・ワン”による新型モビルスーツの強奪。

あつという間に、秩序は壊れた。

世界は再び混沌とした闇の世界へと突き進むことになる。

鏡を見る。

私だ。

いつもの“不安げ”な表情の自分だ。

地球連合軍中將、シユリア・マードはそんな自分が嫌いだった。彼女は鏡を見つめるのをやめれば辺りを見渡す。今はまだ『みんな』の起床時間でもない。とりあえず本日の任務連絡に艦橋へ向かおうと歩き出した刹那。

「おはよー。シユリア起きるの早いわねえ……」

私の名前を呼ぶ声が聞こえる。

その声の主はエヴァ・レオネルド。長い黒髪で黒い瞳、一見して東洋人を思わせる少女である。まだ起きたてなのか、ジャージ姿で眠たそうな目を擦ってる。

「おはよう」

シユリアは言葉を返す。シユリアはエヴァを含めた『みんな』が好きだった。

エヴァはなぞるようにシユリアの姿をじっと見つめてしばらくして言う。

「スカート……長すぎ……!」

シユリアの制スカートを指差しながらエヴァは思わず感嘆……いや、哀れみともとれる視線で呟く。

「…そ…？そうか…一応、昨日よりは短くしてみたんだ…」

「アンタねえ…せめて膝より上は基本でしょ？」

シュリアの言葉も虚しく、エヴァは理屈を並べつつも辺りを見渡して、誰もいないことを確認し、シュリアの腰に手をかけて上着の下のスカート上部を巻き上げてる。

エヴァの意地での行動にシュリアはただ流されるままに彼女に身を任せる。

「よぉーし、こんなもんかな。」

エヴァが息をついて、シュリアを見つめる。

「シュリアは足のラインがすっきりしてるからミニスカートでも十分可愛いのだ！分かる？」

「…う…うん…ありがと…」

シュリアが言葉を返せばエヴァはにっこりと笑顔を浮かべて頷く、エヴァが何の気無しに自分の携帯電話を手に取り、そこに表示され

た時刻を見て感嘆する。

「…えッ！？もう集合時間！？じゃあ、シユリアまた後で…！」

急いで走り去るエヴァにシユリアは笑顔で手を振る。

彼女は再び、鏡を見やる。そこには先程までの“不安な表情の自分”はとくに消えうせ、“笑顔の自分”が鏡の奥からシユリアを見返してきた。

ザフト軍ウアレフォル隊所属、ナスカ級戦艦“モンテスキュー”。
彼らは“アーモリー・ワン”でのモビルスーツ強奪事件以後、プラント付近やその近郊区域の防衛任務のみに務めていた。もともと彼らは単独でこの防衛任務に当たっていた。理由はこれだ。

『ウアレフォル隊であれば、ナスカー一隻で護衛任務も十分であろう』という、ある意味理不尽な理由であった。

『隊長、所属不明艦を一隻確認しました。艦橋へお願いします』

その“モンテスキュー”の駄々広い艦長室には振り合いな小柄の少年が椅子に腰掛けながらオペレーターの緊急通信に耳を傾ける。

「他に戦艦は？」

少年の名はブラッド・ウアレフォル。この艦及び隊全体を指揮するウアレフォル隊長だ。真紅の瞳に真紅の髪、まさに鮮血のような色の瞳と髪をした少年だ。

少し見たら少女にも見えてしまうようなあどけなさとは裏腹にその視線には殺気がひしひしと籠っている。

『後方にはアガメムノン級が二隻展開しています』

オペレーターの返事に対してブラッドは椅子から立ち上がり、傍にかけてあった銀色の軍服を身に纏いながら相手へ命令を下す。

「…解った。俺も艦橋へ向かう。『あいつら』にも出撃準備をさせておけ。」

艦長室のドアを閉じ、宇宙の無重力の中、慣れた動きで艦橋へと向かう。

移動の途中にブラッドは何かを感じ、そして思い出すように呟いた。

「…シュリア・マードか。」

そしてブラッドが艦橋のドアを開こうとした直後、艦全体が大きく揺れた。思わず彼はドアを開けて叫ぶ

「…何があつた!？」

緊迫した艦橋の中、誰もが入って来たブラッドに目を向ける。

そこに居た一人の青年、トーマス・ロランはパイロットスーツ姿でブラッドの頬を後ろから手で撫でながら言う。

だが、ブラッドはその行為にも動じない。

「右翼をやられたわ、“モニターダガー”よ、隊長っ」

“GAT-0023モニターダガー”。背部にモニターストライカーと呼ばれる追加ユニットを搭載したモビルスーツだ。通常ダガーと比べて機動力や戦闘力が大幅に低下しているが、後背部ユニットモニターから巨大な立体光学映像を作り出し、敵をかく乱させる事が可能であり、更には映し出したもの熱紋や熱量すらも右手に装備したビームスコープで作り出す事ができる。

「トーマス、出撃準備は連絡として入っているハズだが？」

ドスの効いた声でブラッドはトーマスに問い詰めるが、そんな表情もトーマスにとってはたまらなく快感になるらしい。

トーマス・ロランは黒の混じった金色の髪をした青年で、その独特の女口調が個性を引き上げる、いわゆる同性愛者である。

「まあ、そう固い事言わないでよ隊長、アタシは隊長の可愛い顔を見たいっ……」

トーマスはニヤニヤと妖しげな笑みを浮かべながら言い訳するもブラッドの耳には全く届いていない。

「……黙っている。早く出撃準備を急げ」

トーマスが艦橋を出て行き、ブラッドが残る二人のパイロットに確認の電報をかければ、『トーマスがいない』との返事が返ってくる。

『構わない、出撃せよ。』

「マード中将。潜行する“モニターダガーL”は敵戦艦への攻撃に成功しました。」

オペレーターの声が艦橋に響く。とりあえず第一段階は成功だ。今度はモビルスーツ戦だ。

焦りながら戦うザフト機にやすやすとやられる兵士はシユリア率いる特殊部隊『N・O・T』には存在しない。

が、シユリアや艦員達の予想を裏切るかのようにザフト機達はみる内に此方へと接近しつつある。特にパーソナルカラーに分けられたくザクウォーリア>とくジン>の動きが目覚ましい。

そんな4機の荒々しい戦い方を見て一つの可能性をシユリアは口にした。

「…ウアレフォル隊…？」

その単語に艦員の表情が一瞬にして蒼ざめた。ザフトでも連合でもその名を知らぬものは居ない、かの有名なザフト最強とも謳われる部隊である。

一人の艦員が今でも逃げ出したいような感覚に襲われて後ろを向けば、シユリアがパイロット達に何かを伝えている姿が見える。

「…『みんな』、大丈夫か？」

「なあに心配してんだよ？」

シユリアの合図にいち早く返事を返したのはロイ・レ・リウルであった。整髪料で固めた金色の髪や耳に空けられたピアス、ギラギラと光るネックレスがいかにも“不良”という雰囲気を出している少年だ。そんな外見とは裏腹にその性格はまっすぐで直情的である。ロイに言われてもまだ不安げなシユリアの頬をエヴァは咎めながらぶにつと優しくつねる。

「ほーらあ。そんな顔しなーい！せっかく可愛い顔なのー」

そう言ってエヴァはシュリアの頬から指を離してウィンク送って
から格納庫へと向かう。

「…うん」

シュリアが無理そうな笑顔を作ってエヴァを見送れば今度は紫色
の髪色の少年がシュリアの手をとってその手をじっと見つめる。

「ちょっと、シュリアちゃん。爪が少し汚れてるねー女の子はキチ
ンとネイルケアしないとー」

柔和な笑みを浮かべてシュリアに注意を残念そうに告げてプラス
ティック板に似た小さな爪磨き用の板を渡したのはルーシー・グリ
フォニウスだ。彼は紫色の髪、そして何よりその女たらしな性格が
印象的な少年である。

「…ルーシー…今はそれでよろじゃn…」

シュリアがいきなり手を持たれて告げられたので驚いてルーシー
に尋ねる。

「だからーちゃんと女の子は手入れしとかないとモテないよ?」

ルーシーが忠告するが、その後ろでは

「あーっ腹減ったなあ…シユリアー、後でカレー丼頼んどいて〜」

今にも鳴りそうな腹部を撫でながらシユリアに頼みごとと言う少女は coron・ブルトウス。髪の毛も短く男勝りな口調はボーイッシュというイメージ…いやむしろ“男の子”と言うイメージを与えそうな少女である。そんな彼女も自分達の姉の様なシユリアには甘えたりする一面もある。そんな素直な気持ちをつづけてくれた coron もシユリアにとってはかけがえのない仲間だ。

「ああ、作戦が終わった…な？」

シユリアが笑顔で言葉を返せば coron はその数千倍ともいえような喜々しい笑顔でシユリアをぎゅっと抱きしめる。

「ありがとー！これだからおれシユリア好きだよー。」

愛情表現する coron をルーシーが横から少し軽蔑するように見つめ「女の子同士でってのも…僕はどうかと思うけどね？」と疑問をつづければ coron は怒った表情で言い返す。

「ちっ…ちげーよ！これは愛情表現だっつーの…！ほら、あれだよ…ハグ！そうハグだっ！」

コロンが赤くなりながらルーシーに言えば「はいはい」と軽く流して格納庫へと向かう。

「おい！まだ話終わってねーだろっ！？ルーシーッ！！」

立ち去るルーシーを追ってコロンも格納庫へと向かった。

しばらくして、パイロット達から出撃準備完了との通信が入ったとの連絡がブリッジに入り、シユリアは命令を下す。

「よし、モビルスーツ隊発進ッ！」

『エヴァ・レオネルド！“コンバット・ギアメット” 出ますッ！』

エヴァの叫びと共にグレー基調のモビルスーツがカタパルトから宇宙へとその姿を現す。『N・O・T』に配備された5機の“ギアメット”は“ウイングダム”の製作過程途中で作られたモビルスーツだ。基本装備として“M704ビームカービン”と腰部には一対の“ES02高出力タイプビームサーベル”そして頭部と胸部には“トードスシュレツケン”バルカン砲塔など、武装の性質は“ダガール”との変化はほとんど無いが、トランスフェイズ装甲を採用しているのが、従来の“ダガー”シリーズを元に使用させていた“ストライカーパックシステム”に対応する事ができず、その為に各種の“サポーターパック”と言う新型のバックパックユニットが開発されたりしたのだが、結果やはり汎用性が極めて低くトランスフェイズ装甲の二重構造による量産コストも高かった為か開発は5機で凍結となった機体である。

そしてエヴァの“ギアメット”に搭載された“コンバットギアメット”は背部の右側にかつての“ストライク”に搭載予定であった非公式武装“XM404グランドスラム”と呼ばれる巨大な実体刀剣を装備し、左側には“コンバットナイフ アーマーシュナイダー”を二丁装備している格闘特化の機体だ。

『ロイ・レ・リウルだ！“ワイヤレス・ギアメット” 行くぜッ！』

右舷から“コンバット・ギアメット”が出撃をすれば今度は左舷からロイの“ワイヤレス・ギアメット”が出撃する。他“ギアメット”同様にグレーと黒のツートンは変わらないがその背部には中央部に巨大なスラスターと背部の左右と上に三基の四角錐に似たピラミッド形状の“有線式ガンバレル”を搭載したモビルスーツだ。

『ルーシー・グリフォニウス、“スナイパー・ギアメット”出撃します』

続けて左舷からルーシー機がスラスターを全開にして出撃する。彼の“ギアメット”は“スナイパーサポーター”と呼ばれたバックパックを装備し、このバックは右肩から伸びた長射程の狙撃ライフル“125mm高エネルギー長射程ビーム砲ミルツツ”が特徴だ。それに加えてそのライフル専用のスコープまでも標準装備とした遠距離支援モビルスーツだ。

『コロン・ブルトウス。“ブースター・ギアメット”行つけえっ”』

カタパルトから出撃を待ちわびたコロンの“ギアメット”のメインカメラのゴーグル部が青白く光る。“ブースターサポーター”は背部に過剰とまでつけられた各種スラスターがその機動性を物語っており、さらに背部中央にはアクロバティックな運動性能を持たせるためのロケットアンカー“EQS1358アンカーランチャー”

を搭載している。

4機の“ギアメット”の機影。そして笑顔で出撃するパイロット達をシュリアはいつもどおりの表情で見送った。

「死にたい野郎は前へ出てきなアツ！」

ウアレフォル隊隊員、シラヒ・アメルダの搭乗する“スラツシュ・ザクウォーリア”が“MA-MR ファルクスG7ビームアックス”を振り回して叫ぶ。と同時に敵の“ダガー”はビームアックスの一閃に巻き込まれて機体半ばから切り落とされる。

その一瞬の間を見計らってきた一機の“ダガー”がシラヒ機に切りかかるが“スラツシュザクウォーリア”の背部に搭載された“MI-M826 ハイドラガトリングビーム砲”に蜂の巣にされて爆散する。

シラヒ・アメルダは青い髪を整髪料で立て上げ、顔中をピアスで繋ぎとめた荒々しい風貌の男だ。パイロットスーツや軍服すら着用せず、革ジャンをただ身に纏った風体で“ザク”に乗り込んでいる。

だが、その意図は解らなくも無い。それは彼の腕に打ち込まれた幾多の傷跡。それは麻薬の注射による痕であり、乱用者となった彼にとっては密閉間のあるパイロットスーツを着ることさえ苦痛なのであろう。

不用意にビームを連射しながら近づいてきた一機の“ダガー”は同じくウアレフォル隊のデイトハルト・シース搭乗する“ジン・ハイマニューバ改”の造作の無い一撃によってあっけなく葬られた。

『実験の材料にもなりませんねえ。』

彼は次々と脱落していく連合軍モビルスーツを見て嬉しそうに、そして何処と無く怪しげな笑みを浮かべた。

デイトハルト・シースは放置されたような伸びっぱなしの白髪に黒い目、かすれて汚れた眼鏡をかけたマッドサイエンティストを思わせる風貌の男である。

ダガー隊は我先と撤退を始めていくが、逃げていく機影の中で此方に向かってくる4機のグレーに染まったモビルスーツを見てシラヒは呟いた。

「…援軍かア？…なんだあの機体は……！？」

『G a t - 0 3 u s ギアメットですね。たしか“ウインダム”開発過程の際に誕生したモビルスーツとかいう…』

シラヒの呟きにいち早くディートハルトが興味深そうに説明する。

「…なるほどな…」

『あらあ面白そうじゃない！アタシが可愛がってあげるわー！』

隣から聞こえてきた通信に二人は後ろを見やる。遅れて出撃してきたトーマスの“ゲイツR”とブラッドの“ブレイズザクファントム”だ。

ディートハルトの説明を通信越しに聞いていたトーマスは“ゲイツR”のスラスターを全開にして“ギアメット”に突っ込む。

「おい！トーマスッ！！……ちい…リーダー。良いんですか？あんな勝手にやらせて…」

楽しそうに敵軍に向かうトーマスにシラヒは制止の声をかけるが虚しく、トーマスは無視して敵部隊へと向かっていく。シラヒは後方で辺りを見据える自分達の隊長の“ブレイズザクファントム”に通信を開き、固い敬語でブラッドに尋ねる。

『…ナチュラルである限り、俺達の敵だ。』

ブラッドはきつぱりとシラヒ、そしてディートハルトに告げる。ウアレフォル隊が有名なのはその強さだけでは無い。隊員…いや、特にこの4人のナチュラルへ対する嫌悪が強く、捕まった捕虜のナチュラル達は惨殺・虐殺されていると言う話だ。無論、ザフトにも捕虜に対する軍規も存在するのだが、この隊の強さ故になんらかの方法で情報を揉み消しているのだろう。

「だよな。」

『そうですよね。』

ブラッドの言葉にシラヒは笑みを浮かべて頷き、ディートハルトも肩を回しながら戦闘準備に入る。

これが、ウアレフォル隊の本気だ。

『…行くぞ、お前ら』

ブラッドの言葉に続いてディートハルトとシラヒが大きく頷き、先行して向かった“ゲイツR”を追うように“ブレイズザクファントム”と“ジンハイマニユーバ改”“スラッシュザクファントム”が続いた。

怯えと笑顔

「さあ！行くわよッ！」

トーマス・ロランが敵部隊に狙いを定めて“MA-M21Gビームライフル”を撃てば、敵部隊はビームをかわしながら散開し、敵もビームカービンをトーマスに向けて多方向から放ってくる。

「…連携はうまくとれてるみたいね。けど、それだけじゃダメよ！」

迫るビームの驟雨を縫うように駆け抜け、一瞬の静止が生まれた“ギアメット”に対し、紅の“ゲイツR”は振り向きざまに腰部のレールガンを放った。

射線は“スナイパーギアメット”胸部へ命中し、トランスフェイズ装甲でダメージこそ無いものの、機体は大きく吹き飛ばされる。

『…くッ！』

敵の苦しそうな声を聞いてトーマスは思わず笑みを浮かべる。

「……なかなか良い声あげるじゃない！」

トーマスは続いてビームライフルを向けて連射するも、そこへもう一機“ブースター・ギアメット”が援護に割り込み、アンチビームシールドで“ゲイツR”の攻撃を防ぎきる。

連合の新型機“ギアメット”とやはら思った以上の性能を持っており、元々の機動力も“ゲイツR”より高い。パイロットもナチュラルよりかは上であろう。

『こんのオツ！』

エヴァの搭乗する“コンバット・ギアメット”が長剣を振りかざして、トーマスへ斬りかかる。が、それをもトーマスはシールドで見事に受け止め、横へと払い流す。

とどめへと放とうとしたビームライフルも新たに現れた“ワイヤレス・ギアメット”が前に躍り出てビームを防いだ。

「数が多いわねエ……！」

トーマスは舌打ちした。

そして、彼は本能に突き動かされるように上方から放たれたビームの砲撃を回避する。体勢を戻した“スナイパー・ギアメット”が

再び攻撃態勢をとったのだ。

隙を生んだトーマスの“ゲイツR”に“ブースター・ギアメット”がビームカービンを連射する。

が、襲い掛かった“ブースター・ギアメット”に対し、“ゲイツR”の後方から一条のビームが迸った。

『…ジン！？』

コロンが、放たれた砲撃地点へと目を向けた。

現れたのは“ジンハイマニューバ”。追加されたスラスターに加えており、完全に旧式機と化していた“ジン”ながらも“ゲイツ”に匹敵するほどの性能を備えた上、デイトハルト・シース独自の改良が加えられており、ザフト最新鋭量産型モビルスーツの“ザク”と同様に各種の“ウィザード”を換装する事も可能である。

今、デイトハルトの“ジン”が装備している“ウィザード”は“ガナーウィザード”と“ブレイズウィザード”をデイトハルトが改良して作り上げた“フレムベルウィザード”と言われるタイプで長い砲身の“M1500オルトロス高エネルギー長射程ビーム砲”と背面モジュール部に“AGM138ファイヤビー誘導ミサイル”

”を装備した高火力タイプだ。

「……デイトハルトね。」

トーマスが猛追してくる“ワイヤレス・ギアメット”をデイトハルトに任せて、その場を離れようとした刹那。

『逃げるなアツ！』

ロイの声と同時に“ワイヤレス・ギアメット”の後背部から何か
が四方へと飛び散った。

狙撃の体勢をとろうとしていたトーマスは、“ワイヤレス・ギア
メット”から放出された何かを感じ取り、全方位から放たれる恐る
べき脅威の武装に気づいた。ナチュラルはおるかコーディネーター
でさえも非常にコントロールが難しいと言われる“有線式ガンバ
レル”……と言っても、今戦っているのは寧ろザフトで開発された『分
離式統合制御高速機動兵装群ネットワークシステム』『ドラグーン
”に近いものとれる。

「ガンバレル？懐かしい武装ねえ。まあ、少しは楽しめそうじゃな
い！」

所詮、放たれた数といえどたった三基。自分にとっては何も苦で
は無い。

暗闇の宇宙ではほとんど不可視状態の“ガンバレル兵装ポッド”をトーマスは見切り、次々と来る射線を回避していく。

攻撃をかわしながらも、トーマスの射撃は精密さをまし、ついに一機のポッドが“ゲイツR”のビームライフルの銃口直線上に並び、撃墜された。

『ちいッ……！』

ロイが毒づくように吐き捨て、腰部からビームサーベルを引き抜いて、“ゲイツR”へと向かう。

「やるじゃない坊や！アンタみたいなタイプは嫌いじゃないわよッ！」

『気持ち悪いんだよ！このオカマ野郎ッ！……！』

トーマスの台詞に対してロイが叫び返し、トーマスも振りかざした“ワイヤレス・ギアメット”のサーベルを跳ね除け、“ゲイツR”もシールドからビームクローを出力させてぶつかり合う。

「……言ってくれるわねェ！」

互いのビーム刃から火花が散る。“ゲイツR”が“ワイヤレス・ギアメット”から離れ、ビームライフルを連射する。

二基目の“ガンバレル”が撃墜され、ロイは後退しながら頭部バルカン“トーデスシュレツケン”で“ゲイツR”を牽制しながら“ワイヤレス・ギアメット”本体へ向かってくるビームの猛火をシールドで防ぐ。

『ロイツ！！』

現れたエヴァの“コンバット・ギアメット”が“ゲイツR”の一瞬の隙について長剣を横に一閃する。

“ゲイツR”が後退する瞬間、ロイにはエヴァ機の直上にキラリと見えた一機の機影が見えていた。思わず鋭くエヴァに叫ぶ。

『エヴァ！上ッ！』

『ッオラアアアッ！！』

シラヒの叫び声と共に“スラッシュ・ザクウォーリア”が巨大な戦斧を手に“コンバット・ギアメット”へ襲い掛かる。エヴァはさっと離れて攻撃をかわしながら、背部に装填された“アーマーシュナイダー”を追うように投げつける。

相手は振り向きざまに両肩のビームガドリング砲を放って小さな

ナイフを叩き落す。

「さあて、行くか。」

後方で一機構えていた“ブレイズ・ザクファントム”の中でブラッドが指でキーを叩きつつ、あたりを見渡した。

さっきからトーマス達はデイトハルトが言っていた例の“ギアメット”とやらの掛かりきりになっている。

まあ、『あの女』が出撃しているのであれば、無理も無いかも知れないが。

“ブレイズ・ザクファントム”のバーニアを噴かした瞬間、前方から現れた一機の“ギアメット”が此方に向けてライフルを放ったのだ。

「何……ッ!？」

“ギアメット”は4機のはず……。まさか、『あいつら』がやられたとも言っのか?!

『…ええいッ!』

ブラッドに襲い掛かる“ギアメット”は右手でライフルを放ちながら、左腕にサーベルを保持している。

「シールドを持っていないとは…自殺行為か？」

首かしげるように呟くブラッドだが、“ギアメット”の背部に換装させられた見慣れぬ『サポーターパック』にブラッドは気づく。一対に大きく羽根のように競り出したビーム砲にも見えるバックユニット。

その“ギアメット”に非常に似たモビルスーツがブラッドの記憶の中に照らし出された。

“CAT-X X/3 ハイペリオン”

前大戦の後期にユーラシア連邦が開発したモビルスーツである。そして、それによってもたらされた技術は『シールド』の概念を変えた。

「…ビームシールドか！そんなモノは読めてるぜ!！」

“ブレイズ・ザクファントム”はすぐさま戦闘態勢をとり、少し離れた…中距離と呼ばれる間合いからビームとミサイルを連射する。相手はその奔流を回避しきれなかったのか、すかさず、背部のバックパックを前方に展開し、そこから数基のユニットが飛び出す。

そこから出された明緑色の見えない壁、そう。これこそ光波防御帯“アルミューレ・リュミエール”。

『実体弾だろうが、ビームだろうが…これでッ！』

敵パイロットの声にブラッドはふっと口元に笑みを浮かべた。

『あの女』…シュリア・マードの声だ。

シュリアの搭乗する“ヒュペリオン・ギアメット”は名前の通り前大戦後期にユーラシア連邦が開発した“ハイペリオン”をモデルとし、最大の特徴は<アルテミスの傘>をモビルスーツに転用した<モノフェーズ光波シールド アルミューレ・リュミエール>。外部からの攻撃を完全に防ぎ、その一方で内部からの攻撃を可能にしている。が、消費エネルギーが激しく、稼働時間が極めて短いため、

バックパックにはビームシールド出力装置以外の武装は装備しておらず、そのほとんどがエネルギー供給用のカートリッジとなっている機体だ。

「シユリア・マードだなッ!!」

『…え?』

ブラッドはビームトマホークを抜き放って円を作り出す巨大なビームシールドへ投げつけ、そのトマホークに対し、ビーム突撃銃を放った。光波防御帯に突き刺さったビームトマホーク自体が誘爆を起こして巨大な爆発を巻き起こし、流石のモノフェーズ光波シールドも内部からの攻撃では用をなさず、何事も無いように消え去った。

「…やはり、お前か!あの施設以来じゃねえか!ええ!?!」

ブラッドの揶揄するような言葉にシユリアははっとなる。

この男…私と同じ『施設』の出身?

『何者だ……!?!』

「ブラッド・ウアレフォル様だアッ!!」

シュリアがビームカービンを撃ちながら声を返せば、ブラッドは高らかに己の名を名乗り上げる。

ビームトマホークの片方を失ったものの“ブレイズ・ザクファントム”は背面部ミサイルやビーム突撃銃で徐々に“ヒュペリオン・ギアメット”を追い詰めている。

「…お前らは『施設』を脱走したとか行ってたな！だが、俺は生き残ったんだ！俺だけがなアッ！」

もう片方のシールドからビームトマホークを抜き、ビーム刃を出力させて切りかかり、シュリアはその腕を弾き返して離れる。

『…脱走…』

言葉を呑むシュリア。確かに、私はあそこから逃げた。あの閉ざされた空間の中から、名前も覚えていないあの少女と二人で。

これは、後に私が知った話だが、私と少女が脱走したあの日、『施設』自体がおかしくなってしまうたらしい。

『施設』中の人々がお互いを殺し合った。

そして、一人の少年のみを残して、皆死んだ。

『じゃあ、あの日生き残ったって…？』

シユリアの言葉にブラッドは笑みを浮かべる。

「そう。この俺様だ」

“ブレイズ・ザクファントム”が“ギアメット”から一瞬、離れる。

シユリアは何かの息苦しささえ感じていた。前方よりひしひしと伝わってくる、ブラッドの殺意。あの『施設』で彼が何人もの人間を殺し、それらをエサにしてどんどん肥大化し、彼はここまでの強さを手に入れた。少なくとも途中で脱走した私達より…

「…お前に俺は止められねえよ。お前では殺戮者にはなれない！…あの『施設』を出た俺だけが究極の殺戮者だ！」

静止していた“ブレイズ・ザクファントム”がライフルを構えて、“ヒュペリオン・ギアメット”に連射しながら突っ込んでくる。

ビームシールドを破壊され、防衛手段の無いシュリアは後退しながら牽制のビームを撃つが、相手は細かい動きで射線かわし、“ヒュペリオン・ギアメット”に大きな蹴りを浴びせる。

『…つく……！』

体勢を崩した。もう避けられない、ブラッドの“ザク”の銃口は“ヒュペリオン・ギアメット”のコックピットを向いている。
シュリアの脳裏に『死』の単語がよぎる。

が、銃口から放たれたビームを“ヒュペリオン・ギアメット”の前に飛び出した“スナイパー・ギアメット”が真っ向からシールドで受け止めた。

『シュリアちゃんッ！無事！？』

ルーシーは言葉をかけ、返事を聞かずにスナイパーライフルをすぐさま“ブレイズ・ザクファントム”に連射し、そのうちの一発が“ブレイズ・ザクファントム”の左足を薙いだ。急な乱入と思わぬ

損傷でブラッドは機体を翻して後退する。

「……どういう事だッ！？…デイトハルト！！」

“スナイパー・ギアメット”と“ブースター・ギアメット”はデイトハルトが相手しているのでは無いのか？！

ブラッドはその可愛らしい外見には似合わず、眉間に皺を寄せたまま僚機に向かって怒鳴りかかる。

デイトハルトが額に冷や汗を掻きながらも、矢のように急いで“ジン・ハイマニユーバ改”を駆りブラッドの元へ向かう。

彼の瞳には『恐怖』しか映っていなかった。

『は…ッ、申し訳ありませんブラッドさまッ！しかし…』

「言い訳は聞きたくないッ！」

デイトハルトがブラッドのところへ戻った所為か、それぞれ戦っていたトーマスの“ゲイツR”とシラヒの“スラッシュ・ザクウオーリア”も行動を共にしてブラッドの所へ帰還する。

ブラッドの口から言葉が放たれた。

「撤退だ。」

いまだ優勢な状況にも関わらず撤退を始める事に対して驚いたのはウアレフォル隊員だけでは無い。通信越しに聞いていたシユリアたちもだ。

だが、撤退の言葉にシラヒが『ちょ、ちよつと待ってくれよりーダーッ！まだ戦い足りな…』と言葉を漏らす、その言葉に重ねてブラッドは

「この俺の命令に何か不満か！？」

発せられた言葉はシラヒの背筋を凍らせるほどの殺気が籠っている。

先程のディートハルトと同様にシラヒも怯えを浮かべながらブラッドに口出しはしない。

“ゲイツR”と“ジン・ハイマニユーバ改”、“スラツシュ・ザクウォーリア”が“モンテスキュー”へと戻り、

シユリアを除く4機の“ギアメット”隊が母艦へと帰還する。

最後に空間を去ろうとしたシュリアにブラッドは言う。

『シュリア・マード。今日はとんだ邪魔が入ったが、次こそ一対一で決着をつける……『施設』の生き残り同士な。』

ブラッドの口元にはかすかに嬉しそうな笑みがこもっていた。それは戦う相手を探し続ける『殺戮者』としての喜びだ。

スラスターを噴かそうとしたブラッドに対してシュリアは言葉をかける。

「…ブラッド・ウアレフォル！…聞きたいことがある！」

『何？』

シュリアの言葉にブラッドは思わず首を傾げる。

「あの少女は……私と共に逃げたあの少女の行方…知らないか!？」

シュリアはどうしても知りたかった。私をあの『施設』から開放してくれたあの少女を。

だが、ブラッドは首を横に振る。

『…知らんな。』

ブラッドの言葉が聞こえた時、彼は既にもう宙域を去り、母艦の元へ向かっていた。

やはり、あの時の少女はもう居ないのか……？

“モンテスキュー”の艦長室に戻ったブラッドはシャワールームから姿を現す。バスタオルで顔を拭い、濡れた髪のまま、コンピューターのディスプレイに目をやる。

画面には何十人もの子供の顔と名前が表示されている。ブラッドは様々な場所をクリック、スクロールしながら呟く。

「…もう一人…」

今日の戦闘でシュリア・マードから聞いた話だと、どうやらシュリアと共に逃げた奴が居るらしい。

そいつを倒さない限りはあの施設で開発されていた究極の殺戮者にはなれない。あの施設の中で生き残った唯一の人間はこの俺だ。

『ブラッドさま。』

モニターの別の場所からディートハルトの顔が映し出される。先程のことであつてか、いつも啜えている煙草も無く、おどおどと怯えきった表情である。

「…なんだ？」

ブラッドにはディートハルトの怯えの理由など解らない。いや、解ろうともしない。その原因が自身であつたとしても。

『先程は申し訳ありませんでした。』

この少年は『施設』にて、恐怖の感情をとくに失ってしまったのだから。

「…ああ、それよりデイトハルト。あの『施設』の子供について更に詳細な情報、調べておけ。特に死亡・脱走のデータについてな。」

デイトハルト・シースはウアレフォル隊のモバイルスニッパイロットとしても有名だが、様々な分野の科学者としても名が高い人物だ。かつてはプラント最高評議会議長ギルバート・デュランダル氏とも遺伝子工学の分野で共に研究に励んでいたの事。

その後は、各種の研究所を転々としていたらしい。そして彼が在籍していた数々の研究所の中には『施設』の名前もあった。システムエンジニアとしても活動していた彼にとって『施設』のデータを洗い流すなど容易なのだろう。

ブラッドは通信を切り、ソファへとまたれ掛かる。

「…脱走か。」

「…シュリア！お疲れ様っ！」

コックピットよりワイヤーを伝って降りてきたシュリアに一番に声をかけてきたのはエヴァ・レオネルドであった。その後ろにはロイヤルシーの姿も見える。

エヴァから差し出されたドリンクを飲んで一呼吸した後、シュリアは笑顔の表情で言う。

「ああ、ありがとう。」

シュリアは再び『みんな』を見る。こんな私でも『笑顔』で迎えてくれる『みんな』、今まで地球連合軍の部隊を転々としてきた私だが、本当に今の『N・O・T』に在籍できて良かったと心から思う。

本当に良かった。

『死』と常に隣り合わせの中で生きる軍人をしているが、あの『施設』ではこんな喜びは無かった。

あの施設でこの『笑顔』は教えてもらえなかったから。

だから私は……

「シュリア……腹減ったああ……！……カレー丼、カキフライ……焼きそばア……！」

コロンがシュリアの身体にしがみ付いて言葉を漏らす。が、ロイの平手がコロンの頭をはたいて叫ぶ。

「意地汚エんだよ！……このクソガキッ！」

「痛っー！！！」

そのやり取りにシュリアは堪えられなくなったのかクスクスと笑いながら「っ…ごめんっ。今から頼んでくるな。」と優しい表情でコロンを見つめ、食堂へと向かう。

「やったあーっ！カレー丼、カキフライ」

走り去るシュリアの姿を見て、嬉しそうに飛び跳ねて歌を口ずさむコロンにルーシーは「ガキフライ？…それじゃ共食いじゃないの

？」と皮肉った言葉の横槍を入れる。

「…何か言ったか？この生殖器！！」

コロンはシュリアから手を離してルーシーを思い切り睨みつけ、ルーシーも平然を装ってはいるものの、瞳には怒りの焰が煮えたぎっている。

睨みあう二人にエヴァが止めに入り、ロイは叫んだ。

「ちよっ…二人ともストップー！！」

「いい加減にしろオーツ！！」

喧嘩やちよっとした悪ふさげで突っかかりあいもあるが、シュリアは『みんな』が好きだった。

ルーシーとコロンの言い争いとそれを止めるロイとエヴァの声が食堂にまで届くが、彼女の耳には『みんな』のこんな声すら心地よく聞こえた。

「…『みんな』。ありがとう。」

シリアは思わず呟いた。

プレスレット

『ジャンク屋組合の本拠地より地球連合軍の要塞衛星が狙撃された事件ですが…』

地上波テレビを見ていた少女は画面に映ったニュースキャスターの発言の途中でテレビの電源を落とした。

少女は寝転がっていたベッドから立ち上がり、デスクの上のキーを叩いて通信回線を開く。

画面に映った人物は“オーブの影の軍神” ロンド・ミナ・サハク。伶俐な美貌に漆黒の長い髪を持った女性だ。

「ミナー。あたし、ちよつとコペルニクス行つて来るー。」

少女は軽い調子でロンド・ミナ・サハクにそう告げた。オーブ連合首長国 軌道エレベータ『アメノミハシラ』の全主権を持つ“オーブの影の軍神”を呼び捨てで、しかも敬語などは全く使わずにまるで友達と喋っているような感覚で言う少女の姿に、ロンド・サハクの後ろに居たジャンク屋達も思わず驚きの表情を浮かべる。

ロンド・サハクも憤慨の言葉も何も無しにただ『ああ、解った。』とだけ告げて通信を切った。

現在ここ、『アメノミハシラ』にはニュースにもあつた通り、ジャンク屋組合の人々が避難に来ている。ジャンク屋組合の本拠地である“ジェネシス”から連合軍の施設に向かって狙撃が行われたらしい。この事件はウィルスによる誤射が原因だったらしいが、相変わらずの地球連合は“意図的な攻撃”と判断してジャンク屋を襲撃したらしい。それが原因でこの『アメノミハシラ』へ避難していると云う情勢だ。

少女はあつと言う間に衣服を着替えを済ませていた。そして机に置かれた小さな鏡を持ち上げて自分を見つめる。

「よし！いいカンジ！」

少女は黒い目に、そして明らかに染められた茶色の髪。幼さが残る繊細な顔立ちは東洋人の雰囲気を出している。

手に持っていた鏡を机へ置き、ちらりと置かれたまだ開封したての化粧品と見られるボトル容器を見て少女は笑みを浮かべ、そのまま自室から廊下へ出た。

「でもアタシ、幻滅しちゃったな。」

エヴァ・レオネルドは艦内の女子更衣室で軍服から私服へ着替えしつつ、ため息をついた。その言葉に同僚のコロン・ブルトウースも「え？」と言葉を聞き返す。

「ジャンク屋の事よ、中立の立場なのに基地狙撃したって話。」

「ああ、さっきテレビでやってたやつか？」

エヴァが説明するとコロンは納得して言う。

現在、N・O・T・旗艦のアガムノン級戦艦“グランデネル”及び所属艦のアガムノン級戦艦“イデオロギイー”“アンブレラア”と共にの彼らは“地球連合軍39機動部隊”と銘打った偽装をして、月面都市コペルニクスへとやってきていた。

主な目的は食料の補給と整備だが、パイロット達にとっては、久しぶりの休暇と言っても良い。

「ま。こんな話はここまでにして、コロンは今日どうするつもり？」

暗い話題を振り払って、全身鏡を見ながらエヴァはコロンに問いかける。

「おれは…ほとんど食べ歩き」

コロンはすでに着替え終わったらしく、愛用の帽子を被り、手には『コペルニクス食べ歩きMAP』と言う地図が握られている上に、その地図にはご丁寧にマーカーやボールペンで様々なチェックが施されていた。

「あ、エヴァ？ シャツ着れるか？」

エヴァが上からシャツを着ようとするが、彼女にはこのような日常的に器用な動きはできなかった。すかさずコロンはエヴァの手伝いに入る。

それは、エヴァの両手両足を見れば明らかだった。ヒトで言う“四肢”と呼ばれる部分はほとんどが削ぎ取られて義手義足とは違う何かが彼女の四肢を作っていた。彼女の四肢はモビルスーツを操作する上では非常に効率が良く操縦が可能なのだが、このような肩を大きく回したりなどの動きは『この義手』ではできない。

本来ナチュラルである彼女が“ギアメット”を操れる理由の一つが、この義手義足だ。

「ありがとう。コロン。」

笑顔でコロンに言葉を返すエヴァ。

「エヴァー！コロニー！着替え終わったかー？」

更衣室の外からはすでに着替えを終わらせて二人を呼ぶシュリア・マードの声が響く。二人は同時に「今、行くー！」と告げて事を急いだ。

エヴァは何かを思いついたように更衣室の外に居るシュリアに尋ねかける。

「ところでさー、シュリアー。腕に何かつけてる？」

エヴァの問いかけにシュリアは「いや…」と首を横に振る。すると、着替え終わったエヴァがシュリアの腕にブレスレッドを巻く。革に近い材質で出来ており、独特の文字で言葉が彫られている。

「エヴァ…？これ…？」

「いいの！いいの！アタシが選んだ服なんだし、それに似合うやつ必要だしね！」

遠慮するシュリアにエヴァは指でVサイン作って言った。

『アメノミハシラ』の宇宙港、そこに彼女の機体があつた。
青とシルバーを基調とした装甲色、すらりとした四肢。頭部の形状から見て、オーブ軍のモビルスーツ“アストレイ”の流れを組んでいるのは間違いない。彼女は、何と私服のまま機体へ乗り込んだのだ。

『…じゃ、行つてきまーす!』

通信越しに聞こえてきた少女の声にロンド・サハクは頷いた。ロンド・サハクの隣に居る数人の戦闘用コーディネイター“ソキウス”達も無表情ながら彼女に敬礼を送る。少女は笑窪を作りながら笑顔を見せて、機体を発進させた。

光景を見ていたジャンク屋の一人が、恐る恐るロンド・サハクに尋ねかける。

「…サハク殿、娘さんですか…？」

「いや。」

サハクはあっさりと否定した。確かに全くといって似ていないのだから当然だろうとはジャンク屋も思っていた。サハクは飛んでいった少女の“アストレイ”を優しげな目で見つめながら呟くように言う。

「…自分の娘ではないのだが、それ以上に大切な存在だ。」

「？」

その言葉にジャンク屋も首を傾げた。たまたま拾った戦争孤児なのだろうか。などと考えをめぐらせて見たが、それにしてもこの“ソキウス”達に比べてずいぶん愛情があると思える。

少女の名前は『神奈崎ココロ』。彼女自身は後継者の居ないサハク家の養女であり、ロンド・ミナ自身も信頼を置いている、先程の距離の無い会話もこれで説明がつく。

「あつ、シュリアーっ！あたし、ちょっとロイと向こうのお店行つて来るー！」

エヴァが半ば無理やりにロイの腕を引っ張って近くの雑貨店へと連れていく、いや言い方を変えてみれば“拉致”ともとれる。そんな二人の姿を見てルーシーはニヤリと笑みを浮かべながら、たしなめるように呟く。

「…本当にただ雑貨店に行くだけなのかな、あの二人。」

妖しげな笑みのルーシーにコロンが睨みを聞かせて「また“やらしーこと”考えてるだろ？」と言い放つが、ルーシーは「まあ、まだお子様のコロンには解らないよ。きっと」と軽く言い流した。ルーシーの対応にコロンは頬を膨らませて「子供扱いすんなッ！ 同い年だろ！」とルーシーに掴みかかる。

「…あ…二人とも…」

横でつい傍観していたシュリアだったが、彼女の言葉ではこの二

人の喧嘩の收拾がつかない。こういう時にエヴァとロイが居たら話は別だが、肝心のその二人が居ない。

シユリアはとりあえず、その場を離れた。後で『みんな』に戦艦に戻るように電子メールうてば良いだけだ。まあ、絵文字使わないとエヴァあたりに『なんで絵文字使わないのよ!？』って注意されそうだが。

ココロの機体は『アメノミハシラ』で開発された“M1Aアストレイ”の改良タイプだ。中立月面都市のコペルニクスに向かうため武装は全て解除されているが、彼女の機体には“禁じられた機能”が存在した。

ココロがキーを叩いた瞬間、独特の効果音と共に機体全体が宇宙空間に包まれていくかのように姿を消していく。

「“ミラージュコロイド”生成良好、ガス散布による機体損害率は14%。まあ、行き帰りぐらいなら大丈夫かな。」

ココロはひとりごちる。彼女の口からもその単語が発せられた通

り、この機体には“ミラージュコロイド”が搭載されていた。“ミラージュコロイド”は機体及び機関部から特殊ガスを噴出させて機体全体を覆い、カメラによる視認を封じる。が、それだけでは無い。ガスで包まれた機体はレーダーに映る事も熱量を確認することもできない。

しかもこのシステムは以前のユニウス条約で禁止されている事項のはず。『アメノミハシラ』などのごく一部の巨大工場で無いと現在では製造できないのだ。

単独出撃したとはいえ、近くにはイズモ級が二隻ついている。援護と護衛、コペルニクスでの補給を求めて共に来るらしい。

あたし一人でも十分なのに、全くミナは心配性なんだから…

自分の義母を顔を脳裏に思い浮かべて浮かべてココロはふっと笑みを浮かべる。

情勢があまり良くない現在だが、無事にコペルニクスの領域内へと到着した。ミラージュ・コロイドのまま彼女の“アストレイ”は近くの森の中に姿を隠したまま、ココロは機体を降りた。

「よし！んじゃあ何処行こうかなー」

買いたいものとか服とかブレスレッドとか…。軍事施設の『アメノミハシラ』は本当に娯楽施設無いからね。

ほんととはみんなも連れてきたかったケド、少し任務に出払ってるから今日はアタシ独りだけど…ま！楽しんじゃえ！

整備された道路の脇には等間隔に木が植えられている。
ただ独りでシュリアは道路を歩いている。

なんだか久しぶりといった感覚だ。

この部隊 N・O・T・ に入ってからはずっとこんな感じで『みんな』と過ごして来たから、なんだか独りという事に郷愁すら感じてしまう。以前、いや。地球連合に入っただけはずっと独りで…その前なんかはあの『施設』でずっと…

思わず目を閉じた瞬間、走っていた一人の影とシュリアは衝突した。

「…痛あつ……」

「あつ、すまない。」

思わず倒れかけた少女に手をさし伸ばす。お互いの手が触れ合った瞬間、シュリアは少女から何か懐かしいものを感じた。

見上げた先の少女の透き通るような黒い瞳。

「うわあっ！これ懐かしいっ！」

手を引いて立ち上がった少女は、シュリアの右腕に巻かれたブレスレッドを見て声を上げた。

「だいぶ前にオーブで限定販売してたやつじゃん！ほらっ、アタシも持ってるんだっ！」

彼女は自分の左腕に巻かれたブレスレッドをシュリアに見せる。
確かに全く同じものだ。エヴァは確かに元・オーブ人だからこんな偶然もあるのであろう。

「そっいえば、その新しいモデル今日発売日なんだ！良かったら一緒に見に行かない？」

「…え？あ…うん…。」

少女に誘われてシュリアはぼかーんとしつつも流されるままに頷く。初対面の人間に対してこんなに気兼ねなく喋るこの少女。珍しいとも思ったが、それ以前にシュリアの胸にやってきた感情は懐かしさ…いわゆる郷愁であった。

「あ、アタシ、神奈崎ココロ！」

遅れて自己紹介と来た少女。顔立ちや雰囲気は何処と無い懐かしさがあつたが、名前そのものは聞いた事が無い。名前からオーブもしくはアジア系の人種であることは間違いない。きっと何処かですれ違ったりしたので、この懐かしさがあるのだろう。

「シユリア・マードだ。」

シユリアも自己紹介含めて手を差し伸ばせば、ココロは笑顔でその手を握る。

こういう場所では偽名行動が基本だが、相手は軍人ではなさそうであり、なんとなくだが、本名で言っても良いような雰囲気というか感覚というか…そういうものがあつたからだ。

「よし！じゃあ早速行こーっ！」

ココロはシユリアの手を引いて走りだす。向かった先は、巨大なデパートであった。おそらく、このブレスレッドの最新モデルとか言うのを購入するのであろう。このまま誘いを断る事も出来たが、シユリアはそれをしなかった。

まあ、このまま戻っても何も変わってなさそうだから、しばらくはココロと一緒に買い物というのも悪くは無いだろう。たまにはこういうのも買つてエヴァやロイ達を驚かせてやるのも良いだろう。

「…シュリアってさー。オーブのカガリ・ユラ・アス八代表にそっくりだよね。」

雑貨店でニューモデルのブレスレットを見ていたココロがシュリアに対して不意に呟いた。

その言葉に思わずシュリアは一瞬、苦虫を潰したような表情になるが、すぐに冷静を取り払って「ああ、よく言われる」とさりとて言い流す。

シュリアとカガリ。それは誰も知らないであろう因縁の関係があったのだ。

オーブ国民であろうココロにそんな事を言う必要や意味はまるで皆無。それより逆に気を使わせてしまつて帰つて場の雰囲気悪くするだけだ。

「でも、まあカガリよりかは全然ファッションに気使ってるからね

「」

先ほどまで視線をブレスレッドに向けていたココロはシュリアの方に振り返って笑顔でそう言った。

「え…それって…カガリよりファッションは優れてる…ってこと？」

思わずシュリアは聞き返してしまう。今まで自分は全てカガリ・ユラ・アスハの影の存在だった。カガリに勝る場所なんて無かった。常々からそう言われ続けた私なのに…。

「ま、カガリの彼氏はもう一段階ヒドかったけどね…だいたい黄色のアレを…」

再び視線を雑貨品に戻してココロは愚痴を呟くように言った。だがその後の言葉はシュリアの耳にあまり届かなかった。シュリアは初めて人に認められた気がしてなんとなく嬉しかった。というか、何故この少女はオーブ絡みのアスハ家について詳しいのだろうか。もしかして、両親がアスハ家と何か内密な関係にでもあるのだろうか。

が、シュリアの思考回路はココロの「ちょっとシュリア！これ可愛いつ！」の言葉に掻き消された。

「今日はありがと。楽しかった。これ、アタシのおごりだから！」

整備された道路の脇にある小さなベンチ。ココロが笑顔でシュリアに一杯のジュースを差し出す。あの後には、色んな店を転々として2時間ほど（まあ、ほとんど買い物に付き合わされたとも言つかもしれないが）してから、再び二人は出会った場所へと戻ってきた。彼女が差し出した一杯のジュース。たった“一杯だけ”だがそこには無限の優しさや思いやりが込められているように見えた。

「ありがと。」

シュリアは紙コップを受け取った刹那、時計を見ていたココロは不意にシュリアの方を見て手を合わせた。思わずシュリアは顔を傾げる。

「どつしたんだ？」

「ちょっと急用思い出しちゃって……！ごめんっ！じゃあ！」

そう言うや否や、ココロはすぐさま駆け出した。

シユリアは携帯電話を開き、メール送信画面を起動させて『みんな』に“グランデネル”に戻るようにメールを打つ。その文章にはいたるところに絵文字やデコレーションが散りばめられていて、エヴァ達はきつと驚くことであろう。

ココロから貰ったジュースを飲み干し、立ち上がったシユリアは“グランデネル”へと足を運ばせた。

「……楽しかった。」

彼女の口からはそんな言葉が笑顔でこぼれていた。

飛躍する翼は

神奈崎ココロはいつもどおり、オーブ軍戦艦“イズモ”の自室で手鏡に映る自分を見ていた。少し巻かれた髪を直毛に戻し、自分から見て左上にかけて大きめの髪留めで茶の髪をはさむ。

だが、その風体は私服ではない。少しばかりか幼さを感じさせる…学生服を身に着けていたのだ。赤いプリーツスカートとネクタイ、白を基調としたブラウス。そして胸元にはオーブ軍のマークをモチーフにしたと見える校章がつけられていた。しかし、ココロは現在、学生の身分ではない。れっきとしたオーブ軍“アメノミハシラ”所属の軍人だ。何故彼女がいまだにこの制服に袖を通していいのかという…

「うっし！降下準備完了ー！」

彼女は今から“オーブ連合首長国”へと降りる。彼女がいつも地球へ降りる際に着る服装は概ねこれだ。かつて自分達が通っていた中学校の学生服にいつもどおりのあの『プレスレット』。

『ココロ、早くシャトルに。』

養母であるロンド・ミナ・サハクの声で、彼女は「はいー！」と軽く返事をして、自室から飛び出た。

ブラッド・ウェアフォルは地球のことについて、検索を続けていた。しかし、専ら例の『施設』の事についてだ。“ユニウス・セブンの被害や地上の状況など、彼にとっては二の次…いや、もっと先とも言って良いだろう。”

『ブラッドさま。例のデータの検索終了いたしました。』

横からデイトハルト・シースの通信が入る。どうやら彼も『施設』の事について調べていたようである。ブラッドは「ああ」と無機的に答えれば、デイトハルトは咳払いしてから並べるように告げる。

『…ナンバー003、ナンバー341、ナンバー582、それとナンバー165から187までの死体は確認できていません。ちなみにシユリア・マードはナンバー341と推定されます。』

ナンバー003はブラッドの事だ。あの『施設』では900名の
子供達が様々な『教育』を施されていた。

そして、『あの日』に俺は全てを殺した…、いや正確には殺した
つもりであつた。シュリア・マードと『シュリアと逃げたもう一人
の少女』はともかく、予想外にも更に22人取り逃していたのか…。
あの施設の子供を殺さねば俺の目的は達成できた事にはならん。

まあ良い…楽しみが増えた。

ブラッドはディートハルトとの通信を切り、座していた艦長室の
椅子の背もたれに大きくもたれ掛かつた。そして、宙に浮いて慣性
の無いまま飛んでいくドリンクを手にとり、荒っぽくそれを飲み干
す。

「『O m i c i d i o …あとはこれだけだ。』」

彼はデスクの画面上に浮かんだ単語を呟く、『オミシイディオ』
とても読むのだろうか。ドイツ言語に近いその単語は、ブラッドの
心の内の何かを大きく刺激した。

「…高波が心配だな。」

鳴り響くシャトルの中、ロンド・ミナ・サハクは思いつめた声で呟いた。同じシャトルに乗っているココロも小さく「うん。」と機械的に頷く。

小さな群島が本土として成立している“オーブ連合首長国”も“ブレイク・ザ・ワールド”の影響を受けていないはずが無い。落下隕石によるダメージは赤道付近が特に多いとも聞いているし、先ほどロンド・ミナ・サハクが呟いたように、落下隕石の海面衝突による高波の被害が尋常ではないほどの酷さとも思われる。

「…ところでさ、例の落下事件の犯人って、やっぱりザフトが？」

ココロは自分達の近くのシートで眠っている同僚を起こさないようにロンド・ミナ・サハクへ尋ねかけた。

「“アメノミハシラ”の偵察兵も“ジン・ハイマニューバ2型”を観測している。」

ロンドが前方のモニター上に一枚の画像を映しながら答える。確かに“ジン”と見えるモビルスーツが“ユニウスセブン”全体に対して周囲に様々な装置、フレア・モーターと言われる原動機をつけ

ている作業の姿が目に入った。
険しい表情で写真を見つめるココロにロンドは憂鬱そうにため息をつく。

「既にこの映像も、連合は公開しているようだから…」

情勢是最悪の方向へ向かっている。100年単位で安定軌道にあると言われていたプラントの廃棄衛星“ユニウス・セブン”が一部のテロリストの仕業によって、母なる大地…地球へと落下をしたのだ。幸い、ザフト正規軍の活躍もあり、全体そのものの落下は防げたが、破片落下による被害で、何万人の人が死に、そして数々の人が命の危険に晒されたのだ。

こんな写真を何の説明も無く突きつけられれば、地上の人々の怒りの矛先はザフト…そしてコーディネイターへと向くであろう。ザフト機である“ジン”がこんな作業をしていたならば、なおさらである。

「もうすぐ着陸だ。」

ロンドの促す声でココロはベルトを締めた。そうして、しばらくしてから小さな震動が船体を揺らした。

本土への着陸も無事完了し、サハク家のシャトルから二人はオーブ本国、地球へと降り立った。地上の独特の重力感が懐かしさを感じさせる。首都、及び“モルゲンレーテ社”などの軍事施設も集中するオノゴロ島へと降りてきた彼女達にはすぐに周りの首長達が駆け寄ってきて、それぞれに騒いでいる。

オーブの被害や、“アメノミハシラ”での情勢。肩こりそうな話にうんざしてきたココロは思わず、そこに居た一人の首長の一人、現オーブ連合首長国代表首長カガリ・ユラ・アスハの元へと駆け寄った。

「ココロっ！」

カガリは駆け寄ってきたココロに気づいたようで、無邪気な笑顔で話しかけた。

彼女らは15歳の時、オノゴロ島にある公立中学校の同学年だったのだ。クラスこそは違ったものの、行事や合宿等でも同じ班になったこともある。お互いにオーブの五大首長と言われたアスハ家とサハク家の跡取りであったこともあって、仲も良い。

「聞いたぜー、アスランとラングランジュ4の方行っただんどう？」

ココロは相変わらずの“間柄を気にしない”口調でカガリに氣遣い無く尋ねかけた。

“アメノミハシラ”の情報もそれ相応にあるらしく、他の首長でさえも非公開であった『カガリのプラント訪問』に対しても理解しているようだ。無論、『アレックス・ディノ』の偽名を使っているカガリの恋人、元ザフト軍特務隊所属『アスラン・ザラ』のことも知っている。

「で？どこまで？…ちゅーくらいはするよね？普通。」

まるで当然のように言うココロにカガリは顔を真っ赤に染める。そんな彼女にココロは笑顔でぱんと肩を叩きながら半ば呆れた口調で言う。

「まあ、『ウブ』なカガリにはそういうのはまだまだ先かー。」

「っ！そんなことよりもだ！…ロンド・サハク氏がわざわざ“アメノミハシラ”から何故本国に？」

カガリは咳払いしてから冷静を取り繕うようにココロへ尋ねかけた。

普段は本国の状況の確認のため、ココロが『アメノミハシラ』大使』として、一部の随員のみを連れて、オーブ本島へと降りてくる事はよくある。しかし、今回は“アメノミハシラ”の全権を持った『オーブの影の軍神』ロンド・サハクとともに降下してきたとな

れば、皆驚くのも当然である。

「アストレイ”の後継機、量産段階入ったんだろ？」

ココロはカガリの問いかけに肩をすくめて、右上視線に並んだ一機のモビルスーツを指差して言った。

MVF-M11C“ムラサメ”。オーブの量産型モビルスーツ“M1アストレイ”の後継機であり、一対カメラアイと独特のアンテナ、連合軍の“ダガー”に似通ったすりりとしたボディは“ガンダム”に近い印象を受ける。詳しい事はココロ達も聞かされてはいないが、島国オーブならではの改良が頼越されており、一対に搭載された大きな翼、“アストレイ”より幾分か細く見える機体の概観は大気圏下でもすばらしい航空性能を発揮するのであろう。

「アメノミハシラ”でも量産に入るのか？」

「アスハ代表。もうすぐ時間です」

カガリがココロに尋ねかけたその瞬間、一人の随員が、カガリに向かって鋭い声で話しに割り込んできた。

「よく解らないけど、まあ、詳しいことはミナ…あ、ロンド・サハクに聞いてッ！…うん、ありがとう。」

ココロは思わず、『ミナ』の名前を口にするが、あわててそれを取り払ってカガリにそう告げ、港から去っていった。

「…共同声明…？」

“モンテスキュー” 艦橋の特別席に座っていたブラッドは隣で立っているトーマス・ロランに聞きかえした。トーマスは自分の爪に真紅のマニキュアを塗りながら呟くように言う。

「ええ、何でも“ブレイク・ザ・ワールド”で影響を受けた野蛮人どもが地球各国と次々と結んでるとか何とか…そんな感じらしいわよ。」

トーマスは『ナチュラル』を『野蛮人』を形容する。彼はザフト軍の赤服に袖を通してはいるものの、元々、アカデミーのトップ15でもなければ、軍人でも無かった。いたって普通の家庭を持つ、普通の父親であった。しかし、家族を“血のバレンタイン”で失っ

た。彼はこの辺りからこういう性格や性質になったと言っ

そして、一人生き残ったトーマスはたまたま、“プラントへの訪問”に来ていた地球国家の首相を暗殺、随員であったナチュラルも全て一人で…惨殺した。その後、彼は収容施設で無期懲役が確定された。

だが、“ザフトに在籍している限りは無期懲役を無効とする”と言う条件の下、ウアレフォル隊の編成のためにやって来たのだ。だからこそ、ブラッドには異常なほどの愛情を注いでいる。

ちなみに、もう一人のウアレフォル隊隊員である『シラヒ・アメルダ』とは、収容所からの知り合いである。

「…データを見る限りは、スカンジナビアも共同声明に参加しているようだな。」

いつも、オーブと共に中立を主張してくるスカンジナビアも珍しく、今回の大西洋連邦による条約を認めている。やはり、“ブレイク・ザ・ワールド”の被害が出ているからなのか、それともただ表面上は連合に組するものとして参加し、甘い蜜だけ吸おうとしているのか。

スカンジナビアは国家公認のスパイ組織があるという噂すら聞いているからな。

「…まあ、どっちにしても宇宙^{そら}に居るアタシたちには関係の無い話よ、隊長。」

トーマス達にとっても正直言えば、地上で飢え、苦しみ、死していくナチュラルなどどうでも良い話だ。

「アスランッ！」

ココロはモルゲンレーテへ向かう途中、ある人影を見つけ、声をかけた。相手は驚いた表情で此方を見ている。

「神奈崎……？」

アスラン・ザラ。前大戦にて、当時最強といわれていたGAT-X105“ストライク”を討ち、奇跡的に生還し、特務隊へと配属。その後にはクライン派と共にザフトを離れ、ヤキン・ドゥーエ戦でZGMF-X09A“ジャスティス”を駆って終戦へと導いた、まさに英雄と言われる人物だ。現在は『アレックス・ディノ』の偽名でオーブで生活を送っている。

「久しぶりっ！」

そして、相変わらずのくだけた調子でココロは言う。アスランも気遣いしていないような表情だ。

「ああ。」

ココロの心中にカガリの顔がよぎった。性格こそ対照的なアスランとカガリだが、これはこれでお似合いか。と勝手ながら考える。アスランに歩み寄るや否や、ココロは歩いてきた方を指差して言う。

「ちょっと時間ある？」

指差したのは何かのお店のようである。アスランは「大丈夫だが……」と少々困惑した表情である。

カガリ以外の女性と店に出かけるという行為自体が、生真面目の塊であるアスランにとっては少しひけるのだろうか。別にそんな怪しい店でもないのに。

お互いに『ウブ』だから　ちゅー　もできないんだな。とココロはふと思った。

「大丈夫だって！店員、アタシの知り合いだし！カガリにはさつき会ったし！」

ココロの言葉にアスランは「解ったよ」としびしび頷く。その表情はまだ疑心暗鬼で満ちているが、そんなアスランを気にせず、ココロは店へと直行した。勘違いされては困るのか、アスランがその数歩後を追って付いて来る。

連れられて入った先は小さな喫茶店だ。あまり繁盛しているとは言いがたく、客の数も店員の数も少ない。が、少しだけ置かれたオブジェや展示品、観葉植物などが柔らかそうな雰囲気を出していた。喫茶店というより、学校の食堂といったイメージが近いのだろうか。

「じゃあ、いつものやつでね。うん、ありがと。」

神奈先はこの常連らしい。カウンターに居た同い年ぐらいの少女に“相変わらずの口調”で話している。とすれば、中学校在学時の同級生か、同学年かであるのだろうか。

テラスから差し込む陽の光がテーブルに反射して心地よい光を見せている。こんな当たり前のような日常が、もうすぐ失われようとしている…そう思うだけで、アスランは何だか暗澹な気分になる。

「えっと…あのそっちのお客様は…？」

「ああ。アスラン・ザラ、あんたもちよつと名前くらいは知ってるでしょ？」

先ほどカウンターに居た店員が注文を届けに来、ココロに尋ねかける。それを制してココロが何の気無しに言った言葉を聞きとがめたアスランが焦った言葉で叫ぶ。

「神奈崎！！」

あくまで、アスランはオーブ国内…いや、この世界では『アレックス・ディノ』だ。そうそう本名を明かすべきではない。

焦るアスランにあくまでココロは「そんな気にすることー？」と調子の良い返事で返す仕舞いである。

「…まったく…本当にそれで“アメノミハシラ”の一佐が務まるのか？」

呆れたアスランが少々いたずらっぽく言えば、ココロは不敵な笑みを浮かべ

「残念でしたー！この間『准将』に上がったんだよーだ！」

「准将っ…！？」

せせら笑ったココロとは対照的にアスランは驚きの言葉を隠せない。准将となれば、部隊の一つどころか、戦艦郡や国防軍ですら直接指揮できるほどの地位だ。

ココロのパイロットとしての素質は高いとは力ガリから聞いていたが、まさかこれほどまでとは思っていなかった。やはり養母である『ロンド・ミナ・サハク』の影響があるのだろうか…たえそうだとしても、その程度のパイロットを准将にまで上げる事はたとえ五大氏族でも不可能だ。

「今度からあたしの方がずっと格上ね、アレックスくん。」

挑発するように言うココロにアスランは何だか腑に落ちない表情だ。

するとさつきから隣に居た少女が、何だか妙な、なまり言葉でココロへ話しかける。

「ねえ、ココロ。准将って何っしょや…？」

その言葉にココロは「はあ…」とため息を着いた。説明しようと口を開いたその瞬間、少女の後ろから

「アーホ、軍隊の一番か二番くらいのお偉いさんだべ」

後ろから背の高い少年が店員の少女の頭に軽く手を載せて言った。ぶつきら棒な表情をしていて時々反射するメガネから除く瞳はとても真っ直ぐに見える。そして、先ほどの少女と同じ独特の方言を使っている。

そして、少年はココロに対しても「おっ、久しぶりっ」と手を差し伸べた。

「うっそお！久しぶりーっ！！」

ココロは今にも目じりに嬉し涙を少し溜めてその手をとった。

「こいつは何度も会ってるみたいだけど、俺とはずいぶん会ってないべや。ココロは」

「うん、うん！…あたしさあ、アンタは連合のオーブ侵攻でとつくに死んだとばかり勝手に思ってたさあ…」

「バーカ！勝手に死なすなッ！」

「馬鹿とは何よっ！」

「二人とも店内での喧嘩はいかんっしょや！他のお客様に迷惑かかるべさ！」

「ってかそんな来るほど繁盛してないでしょ？この店」

「っ…ま、それもそうべや。」

「あははっ。」

「ところで話し戻すけど、あんた、世界史は無意味に良いんだから、准将の意味をちゃんと覚えられるっしょや？だから…」

「ココロ、あたし達の方言がうつってるっしょや。」

「ほんとだべ。」

アスランはその口論や馴れ合いを見ていたが、皆、そう言いながら
も幸せそうな表情をしている事に思わず笑みを浮かべた。
こんな日常が本当に続けば良い。そう思うだけであった。

堕ちる世界で

ロイ・レ・リウルは艦内の一室で、トレーニングに励んでいた。部屋の中には天井に大きな照明と、床には様々なトレーニング器具や機材が置かれている。首から下ろしたタオルケットに付着した汗の量と、滲んだシャツがその内容の辛さを物語っていた。

廊下からトレーニングルームに入っていた黒髪の少女、エヴァ・レオネルドが片手にドリンク持ってロイの前へとやってくる。

「おっつー。」

エヴァの声と同時に彼女の手からドリンクが投げ出され、宇宙空間の慣性も無いまま、ドリンクケースをロイがキャッチし、「さんきゅ」と疲れきった声だが、笑顔で言葉を返した。

ロイが座り込んでいるトレーニングマシンの隣にあった同様の機械にエヴァが座り込む。

「…あ、アタシさ…」

不安そうな声でエヴァがロイに声をかけた。ロイは「どーしたんだよ?」と首を傾げる。

「最近、変な夢ばっか見るの…」

「夢?」

途端にエヴァの目から涙が流れ出し、平静さも無いまま、震えるエヴァの『手』をロイはぎこちなく握った。彼女の『手』はもう人肌を感じることが出来ないが、何となく心の芯が温かくなった感じがして、エヴァの震えはいつの間にか止まった。こんな身体になっても、優しく握りしめてくれるロイがいてくれる事が嬉しかった。やがて、落ち着きに戻ってきたエヴァが重い口を開いて話し始めた。

「ああ、じゃあそれは後ほど…」

イリス・ギルガフェリシュはコンピュータ上に映る壮年の男に言葉返し、相手の返事も満足に聞かぬまま通信を一方向的に切った。透き通った青い髪少年だが、子供らしさを全く拒絶した、若干17歳とは思えぬ鋭く冷静な顔立ちと表情であった。

彼のコンピュータのディスプレイ上に浮かんだ一つの単語。

『O m i c i d i o - 』

イリスは前々からこの単語に対する自分の違和感に嫌気がさしていた。この単語の意味ぐらいはもう調べがついている。ドイツ語で『殺戮』という意味を持った単語だ。

だが、彼は前々から『殺戮』…いや、特にこの『O m i c i d i o』と言う単語を見るたびに、全身から何かおぞましいものが出てくるような気がして、嫌で仕方が無かった。何か様々な場所から自分をじっと見つめられたかのような殺気。

ばつの悪い雰囲気振り払うように彼は椅子にかけてあった軍服を羽織り、部屋から外へと出た。

「…もうあれから10年近くも立つのか…」

右手にくる小さな震えを左手で押さえ、彼は廊下を歩いて行く。震えが止まった後、懐から取り出した携帯電話に手をかけ、彼はとある先へと連絡をかける。

「…こちら、F・O・R・Eのイリス・ギルガフェリシュです。」

イリスが入れた連絡の先で、渋い声の男が飄々とした口調で電話

に出て、その精悍とした表情がモニター上に映し出された。

男の浅黒い顔には痛々しいまでの大きな傷跡が走り、右手には、通信越しでさえ香りがただよってきそうなコーヒーカップが握られている。

「ん？あー。イリスか…例の件かね？」

男は陽気な調子でイリスに尋ねかける。

「…はい。修復に時間がかかりましたが、もう大丈夫です。今からでも機体に乗ってそちらに向かいます。」

かたやイリスはいつも通りの丁寧な口調で、男との会話を続ける。

「ああ、すまん。そうしてくれ。」

相手の男はコーヒーを一口飲んでから、イリスに少し投げやりばかりに告げてから、通信を切った。

そして、いつの間にかイリスはある格納庫へと入り、前方に見えた一機のモビルスーツを高々と見上げた。

ZGMF-X10A“フリーダム”。『アラスカ』や『ヤキン・ドゥーエ攻防戦』で伝説的な活躍を見せたモビルスーツだ。動力は核エネルギーの『N・ジャマーキャンセラー』を用い、機体表面に

も実弾攻撃を向こうにする『フェイズ・シフト』装甲を備える。

かつて、前大戦の最後に兄弟機であるZGMF-X13A“プロヴィデンス”と刺し違えて爆発したが、幸い原子炉や動力源に致命的な損傷は無かったらしく、イリスたちの所属する国際スパイ組織『F・O・R・E』が先ほどの男の依頼を請け負って修復作業を続けていた。

『：イオン濃度正常、メタ運動野パラメータ基準値設定良し。』

“フリーダム”へ飛び乗ったイリスは手早く機体を立ち上げて、急ぐように格納庫から飛び去った。

この機体は、彼の借り物だ。傷つけるわけにも行かないし、素早く返すのが礼という物である。

エヴァが最近見る夢。それは、血が自分の全てを包み込んだ『殺戮』の夢だ。

夢に出てくるとある女の子が『夢の中の自分』に手を振り、振り返った瞬間、自分は爆発の轟音と共に血にまみれている。

エヴァは元々オーブ人で、C E 71年に連合が行った『オーブ解放作戦』によって、焼け出された難民である。その後、なんらかの経緯で様々な外科手術を施された上で、このような身体へととなってしまったのだ。

オーブに居た時の記憶は今の彼女には存在しない。

おそらく夢の内容は『オーブ解放作戦』のことなのだろう。

「…大丈夫だ。『みんな』がいるじゃねえか。」

ロイはただ、エヴァの身体をそつと抱き締めた。

『口先だけ』の綺麗な、長つたらしい言葉なんてロイには言えない。ただ、この言葉と抱き締めることしかできなかった。いや、それでよかったのだ。

「ありがとう…ロイ…。」

エヴァはロイの胸に顔を押し付けるように言った。

『で、君達の準備はいつ頃できるのだ？シュリア。』

「はい。こちらの準備はすませてあります。」

モニター上の男の軽々とした質問にシュリア・マードは無機的な口調で答えた。シュリアが今、対談しているモニター上の人物。白銀の髪と醒めた顔立ちが妙に目を引く、年齢は30代後半とでも言うくらいだろうか。その名前はロード・ジブリール。

現在、反コーディネーター団体『ブルーコスモス』の盟主を務める男だ。時の盟主『ムルタ・アズラエル』の戦死で『ブルーコスモス』は衰退の一途を辿っていたが、新たな盟主であるジブリールの登場で再び『地球連合』内での発言力を高めている。

彼にして見れば、ブルーコスモスの私兵団となっているシュリア達『N・O・T.』や地球連合軍『ファントムペイン』の活躍がいまだ芳しくない現状、次の作戦こそは成功して欲しいといった所だ。いや、次の作戦が成功すれば、もはや『N・O・T.』も『ファントムペイン』も必要無いのだが。

「“ネタニヤフ”とも既に連絡はついておりますし…向こうの“ウインダム”も全て『核弾頭』を搭載してあります。後は月基地の援護艦隊だけです。」

シユリアがぼそつと口にした『核弾頭』の言葉。
そう。これからシユリアたちが行おうとしている作戦はいたって
シンプルなものだ。開戦と同時に『プラント』へ核ミサイルを放っ
て終了。『ブレイク・ザ・ワールド』で甚大な被害をこうむってい
る連合としては、長期戦などとなると、様々な面で不利が生じてく
る。だからこそ、素早く『プラント』を討たなければならないのだ。

『思った以上に早い準備ではないか、素晴らしい。』

ジブリールの頭の中には、まだ開戦していないのにも関わらず既
に『プラント壊滅後の世界』の図が浮かんでいるのである。先
ほどから堪え切れないほどの笑みが口元に浮かんでいる。

コーディネイターの無い世界。彼ら『ブルーコスモス』がどれだ
け望んだ事だろうか。

だが、同じコーディネイターのシユリアとしては、たとえ連合軍
側への所屬としても何かやりきれない感触があった。

「では、また後ほど連絡します。」

そういつてシュリアは通信を切った。

『プラント』が滅びれば、確かにザフトは無くなり、残ったコーディネイター達は連合の傘下に入り、様々な苦役を課されるのである。かつて人類が『西暦の時代』に、奴隷制で様々な人種の人々を奴隷として人間以下の扱いにしてきたように。これでは『西暦の時代』から『コズミック・イラ』になっただとしても何も人類は変わっていない。

ただ、対象がナチュラルとコーディネイターになっただけで何も変わっていない。

それ以前に、地球連合に所属している我々N・O・T・はどうなるんだ？『みんな』はどうなる？

私達は戦う事にしか意味の無い存在なのか。スーパーコーディネイター、改造人間、クローン、強化人間：そういったナチュラルとコーディネイターにも属さない狭間の者達は…？

ナチュラルとコーディネイター。仮にどちらが、勝ったとしても私達が存在して良い場所なんてないのか？

戦い続けることに生があるのだというのだろうか。

規則的に花が植えられた公園。が、その花々も高波の被害にあつてか、既に潮を浴びて塩分で枯れかかっている。色あせた二つの花壇の間で真っ直ぐと伸びる道は巨大な石碑と見れるいくつかの構造物へと続いていった。

これは、慰霊碑だ。

C・E・71年に地球連合の手によって行われた“オーブ開放作戦”。その折に避難民の一部は流れ弾の被害になつて亡くなつた。何人もの友達が死に、祖国オーブは連合の支配下に置かれる事となつた。カガリ・ユラ・アスハたちやココロの養母サハクの活躍もあり、オーブ自体の解体は防ぐことが出来、地球連合の占領下となつた領土も取り返せた。だが、彼女がオーブ戦で失つたものはあまりにも大きい。

「…あたし、もう16になつたんだよ。中学卒業して、今、軍人やつてる。」

“エヴァ・レオネルド”

石碑に刻まれ、縦横に羅列した名前のうちの一つに、柄にも無く独り言を呟きながら、彼女は小さな花束を慰霊碑の前へと置く。吹き付ける風ですぐに花は飛んでいってしまいそうだ。今は使われなくなつた古い機種の手持電話を開ければ、そこには、まだ学生だった頃のココロとその親友であつた黒髪の少女が映っていた。

かつては友の命を奪い去つた軍というものの、戦いそのものを心か

ら恨んだ。

だが、自分は今、自分は誰かの“命を奪う側”に立たされている。

「殺戮”か……」

慰霊碑の隅のほうに刻まれた文章の中に見つけた文字にココロは目をやる。

“殺戮”。決して良い言葉では無い　むしろ、忌むべき言葉であるとも言えよう。だが、ココロの記憶に奥底にはこの言葉がぺったりとくっついて離れようとしてくれない。何なのだろうか、この言葉に対する妙な感覚。吐き気がしそうでもあり、かといってじっと見ていれば、何処と無く心地よい気分も出てくる。

「…あら？…ココロさん？」

そんな時、柔らかな声が自分の名を呼んでいる事に気づいてココロは思わず後ろを向いた。

視界に入った、色白の肌に桃色の髪をした少女。一度聞いたら聞き違ふ事は無いであろう、この声は…

「ラクス…。って嘘おん！久しぶりいつ！！」

ココロがその名前を呟く。ついで数瞬してから、驚きの感情がやってきて思わず叫び、ラクスに向かって走り寄る。

ラクス・クライン。かつては“プラントの歌姫”として活躍していた彼女であつたが、前大戦の折に、父シーゲル・クラインとともにプラントの急進派によって命を狙われ、その後は最新鋭艦“エタール”と共に三隻同盟を率いて、戦争終結を導いた英雄だ。といっても現在はオーブの宗教家マルキオ導師の元に身を寄せているらしい。とはココロ自身も聞いていたが…。まさか、こんな所で再開を果たす事になるとは。

「お久しぶりですわね。」

ラクスは軽やかな調子で言葉を返した。

ココロは前大戦の時、“三隻同盟”から受けた『アメノミハシラ』への救援要請でオーブ大使としてサハク家及び『アメノミハシラ』の代表として“エタール”に行った事がある。その時に少しでも話しただけが、ココロのこの性格からして、短い時間でもすぐ、仲の良い間柄になってしまうのはよくある事である。ラクス自身、ココロのそのコミュニケーション力には一目を置いているようである。

こっちの方も結構、被害は出てたんだな…

ココロは思わず潮で枯れた花々に目を向けながら心中で呟いた。
オーブの全体からの人的被害はそうでも無さそうだが、こういった
海岸線に暮らしているラクス達にとっては襲い来る高波は脅威だ。
ラクスの周りに居る子供達も制服姿のココロを見て、少し怯えた
調子で見やっている。

「じゃ、あ…アタシここで…」

気まづくなつて思わず踵を返しそうになつてココロの前に二人の
少年の姿が不意に現れた。

一人は栗色の髪をした少年だ。年齢は自分と同じくらいだろうが、
若さからは思えない程の妙な落ち着きが見える。

「キラッ！」

ココロの真後ろからから少年の名前を呼ぶラクスの声が聞こえる。

キラ・ヤマト。前大戦で“フリーダム”を駆ったモビルスーツパイロットだ。名前くらいなら聞いたことがあったが、まさかこんな繊細そうな物腰の少年だとは思っていなかった。一度見ただけでは“フリーダム”のパイロットにはとても見えないし、そうとも思えない。

だが、ココロを本当に驚かせたのはキラ・ヤマトでは無かった。その隣に居た一人の少年。現在のオーブ正式軍服に身を包んだこの少年は…

「神奈崎か!？」

少年はココロが叫ぶ前に言葉を発した。だが、その声の主自身もだいぶ驚いている様子ではあるが。

「…ギルガフェリシュ…ひ、久しぶり…ってか、その軍服…？」

ふつと不審げにココロは少年に疑問を返した。

少年の名前はイリス・ギルガフェリシュ。オーブの軍服に身を包んではいるが、実はココロと同級生で、学校もクラスも同じ、何回も何回も学級委員を自ら進んで務めていた少年だ。切れ長の瞳と整えられたスカイブルーの髪は、染めた茶髪のココロとは非常に対照的である。

「…認識番号0073466AE、オーブ軍所属イリス・ギルガフエリシュ一佐。」

イリスは手に持ったオーブ軍の認識証を見せながらココロに淡々と告げる。ココロは呆れた様子で相変わらずだな、とばかりに疲れた笑みを浮かべる。

「…はあ…アンタなんで一体此処に…」

「君と同じだ。……レオネルドやみんなの墓参りだ。」

ため息交じりに言ったココロの言葉にイリスは落ち着いたそぶりで返事を返した。

ココロにはイリスの言葉が少し信じられなく聞こえた。学生…いや、こいつが学級委員の時はアタシやエヴァにしつこく制服や化粧についてうるさく言ってたのに。真面目の塊みたいなこの男が、まさか、やんちゃしてたエヴァ達の墓参りに来るなんて。

何だか嬉しかった。イリスについての印象が180度変わったようにも思えた。

開戦

「うわ……パネえ！」

不意にロイ・レ・リウルが食事開始直後に声を上げた。他の四人は叫ぶロイを見据える。
今まで特に何も会話していなかったのに、いきなりロイが声を上げたからだ。

「この特製エビフライ、パネえぞ！……食ったか？」

ロイは箸で大きなエビフライを指しながら皆に勧める。すると『食べ物にはいち早く敏感な』コロン・ブルトウスが誰よりも先に「おれが食べるっ！」とぱくつと一口でエビフライを食べる。

そんなコロンを未だエビフライを食べていない3人が見守る。

「うん！パネえ！」

満面の笑顔のコロンにロイは「そーだろ？」と確認する。すればエヴァ・レオネルドとルーシー・グリフォニウスもエビフライに箸をやって口々に「パネえ」「パネえ」とエビフライを評価する。

そんな中、一人エビフライを口にしていなかったシュリア・マードが横からエヴァに尋ねかける。

「…なあ、なんだその『パネえ』ってのは……？」

「えーっと…最近の若者はねえ、『半端ねえ』ってのをを略して『パネえ』って言うてるのよ」

シュリアの疑問に対してエヴァ・レオネルドが答えた。
エヴァの回答にシュリアは呆れた表情で4人を咎める様な疑問を投げつける。

「せめて、言葉くらいはマトモに使えないのか…？」

その言葉に皆が深く考え込むが、ルーシー・グリフォニウスがエビフライの乗った大皿をシュリアに向けて「まあまあ、ほら、シュリアちゃんも良いから食べてごらんよ？」と勧め、それを見ていた

ロイも「そうだ！シュリアもパネえさが分かるハズだ！」と強く推す。

「うん…じゃあ一口だけ……」

シュリアが箸でエビフライを取り、一口サイズを齧れば彼女の口の中にエビフライが広がる。

…このサクサクとした食感。絶妙な油加減…濃過ぎて辛すぎることも無く甘すぎることも無いソース……

これを言葉で表現するには……私にはできないッ！…いや、これはあのカガリ・ユラ・アスハであれば表現する事ができるのか！？そんなハズは無い。スーパーコーデイナーじゃないカガリ・ユラ・アスハに表現できて、この私に表現できない形容詞などこの世に存在するハズは……！

この間0.5秒でシュリアの思考が止まる。そしてその瞬間エビフライを完全に飲み込んだ彼女は呟いた。

「…美味しい…」

いたって普通過ぎるシュリアの感想に4人は白い目で彼女を見つめる。まるで四人がそのまま凍りついて白骨化したようだった。

そこ言う台詞は、パネエでしょーが。byエヴァ

凍りついた雰囲気の中、点けっぱなしであったテレビの音が妙に響き渡る。

『ブレイク・ザ・ワールドにより、南アメリカのフォルタレザ市やオーストラリアの…』

シュリアらの今の空気と同じように、今の世界情勢も又、凍りついた状態であった。先日の10月3日、不満のあるザフト軍脱走兵が、地球のナチュラルを葬るべく、100年単位で安定軌道に乗っている“ユニウス・セブン”を地球に落とそうとしたのだ。幸い、“ユニウス・セブン”の破砕には成功したものの、破片の落下は防げず、赤道付近を中心として地球に大打撃を与えた。これは、ナチュラルの反コーディネイター感情を高め、現在はその混乱により、地球の各地でコーディネイターの迫害や、ザフト脱走兵によるテロが頻繁に起こっている。

いつの間にかニュース番組は終わり、画面には大西洋連邦大統領
ジョセフ・コーブランド氏の姿が映っていた。

だが、彼は“大西洋連邦大統領”を名乗っているものの、実際は
ブルーコスモス主義者を中心としたグループの傀儡のようなものだ。
元々ブルーコスモス思想の権力者の後押しもあって当選したコーブ
ランド氏自身、ブルーコスモスの意見に逆らえない立場なのである。
ブルーコスモスとは、反プラント及び反コーディネイター思想を
持つ主義者、またはその思想そのものを指す。

『これより私は、全世界の皆様にも、非常に重大、かつ残念な事態を
お伝えしなければなりません。先の“ユニウスセブン”落下はコー
ディネイターのテロ組織が…』

この大西洋連邦大統領の緊急声明は、地球や宇宙を問わずして様
々な人々に向けて発信された。無論、地球連合軍の所属であるシュ
リア・マード達“N・O・T”の隊員たちも、食堂や艦橋のチャ
ンネルを通じてほぼ全員が大統領の演説に耳を傾けている。

“ユニウスセブン”落下 “ブレイク・ザ・ワールド”の直後に

月面都市コペルニクスを出た“N・O・T.”はこれから起こるであろう“プラントに対する連合の宣戦布告”を待っていた。既に別働隊であるアガムノン級戦艦“ネタニヤフ”とも合流を果たし、いつ戦端が開かれても行動できる準備を整えていた。

そして彼らはプラントの極軌道側、小惑星が漂う宙域の中でひっそりと獲物を待つ狩人のように身を潜めていた。

『よって、警告の通り、地球連合各国は本日0時を持って武力によるこの排除を現・プラント政権に対し、通告しました。』

以上で演説は終わった。ついに始まるのだ、プラントと地球連合。ほんの2年前によく戦争は終わったのに。

人間とはこう見ると哀れな存在だな…とシュリアは心の内でふと思った。結局は何度、停戦・平和の声が叫ばれても、あっという間に崩れ去り憎しみだけが世界の中を駆け巡っていく。

後片付けに入っていた食堂に管制員からの通信が入る。

『中将！まもなく作戦開始時刻です！』

その言葉にシュリアは時計を見やった。

「解った……エヴァ達はすぐにモビルスーツで待機を！“ネタニヤフ”との通信回線を固定！」

シュリアから言葉を受けたパイロット達は大きく頷き、急いでパイロットロッカーへと向かった。

この作戦がうまくいけば、この戦いだけで戦争は終わる。シュリアの右手の資料に表示された作戦内容は“プラントへの核ミサイル攻撃”であった。

「…アルザツヘルに妙な動きだ？」

ブラッド・ウアレフォルは相変わらず艦長室で『施設』に関するデータを眺めていたが、部下のトーマス・ロランからの通信に耳をやり、不穏な単語に思わずトーマスの顔を見やった。

いつもなら、トーマスは“「ただ顔が見たいだけ”“隊長の声を聞かないと眠れない”などのどうでも良い理由で連絡してくるのだが、今日は珍しくそうでもないらしい。

『ええ、月面の地球軍艦隊がすでに本国の付近までやって来ている…』

トーマスも珍しく固い口調でブラッドに連絡を伝える。

やはり、狙いはプラント本国なのだろうか。しかし、『“ブレイク・ザ・ワールド”の首謀テロリストは全て死亡した』との報告を地球連合は一度は受理したはず。それを撤回してまで、プラントを……いや、無理にでも開戦したいというわけか。

先ほどはプラントの宇宙空母である“ゴンドワナ”も出撃したと聞いている。戦闘は激しいものになりそうだ。

「トーマス、出撃準備だ。直に俺達にも出撃命令が出る。あらかじめシラヒとディートハルトにも連絡しておけ」

そう言っただけでブラッドは通信を切り、無造作に上着を脱いだかと思えば、パイロットスーツへの着替えを始めていた。

専用の手袋をはめ、Faithフェイスの徽章を胸元につけながら、彼はふと呟く。

「連合が月面から合流して艦隊を編成するならば……」

『あの女』……シユリア・マードがいる可能性は非常に高いものだ。物量に任せて戦うナチュラルの地球連合にとって、シユリアのような強化コーディネイターは非常に大きなアドバンテージを稼いでくれる。そして、トーマス達とも互角に戦い渡り合えるシユリアの部隊の強化人間達も連合にとって重要な駒になるであろう。使わないはずが無い。

「…管制！…以前遭遇した例の地球連合軍の戦艦を見かければ知らせろ！」

ブラッドは思いついたように艦橋へ通信回線を開く。担当の管制員が「はい！」との返事を聞かぬままブラッドは艦橋室から姿を消した。

『第44戦闘団は搭載機の発進を完了した“フォックスノット・ノベンバー”発令。現時点をもって、全オペレーションをフェイズシックスに移行する。』

ノイズに混じった音声で、“グランデネル”に連絡が入る。矢継ぎ早にモビルスーツが発進していく姿は、全く別の場所で待機していた“グランデネル”からも見て取れた。

パイロットスーツに着替えたエヴァ、ロイ、ルーシー、コロンは各自“ギアメット”に乗り込もうとするが、ルーシーをロイが引き止める。

「おい、ルーシー。忘れモンだ。」

そう言うが否や、ロイは薬のアンプルらしき小さなボトルを、機体へ飛び乗ろうとしていたルーシーへ放り投げる。無重力で慣性の無いままボトルはルーシーの手元でキャッチされる。

ルーシーは薬を飲み干し、「ありがとう。」とロイに告げて自分の“ギアメット”へと乗り込んだ。

“ガンマ”・グリフェプタン。先ほどルーシーが飲み干したボトルに記載されていた薬物の名だ。彼はこの薬を出撃時に摂取することによって、ナチュラルながらコーディネイターに匹敵する反射神経や運動神経を身につける事ができる。しかし、この薬の効果時間が切れれば、禁断症状をもたらす、まさにハイリスク・ハイリタインの代物だ。

『でもさ、今回のあたしらの役目って“ウインダム”の援護なんですよ?』

ルーシーが機体を立ち上げていると、僚機であるエヴァの“ギアメット”から通信が入り、他3人の顔も画面に表示される。

『主力隊が戦ってる間は俺らはずっと核乗つけた“ウインダム”の護衛だってよ。』

答えるロイにコロンはぼそりと『なーんだ。戦うわけじゃねえのかよー。 “ウィンダム”の子守なんて、つまんねーなア…』と呟く。

そうするうちにハッチは開き、中から4機の“ギアメット”がそれぞれの“サポーターパック”を身につけ出撃した。

銀色のパイロットスーツに身を包んだブラッドは愛機に乗り込み、すぐさまヘルメットを被って出撃体制をとる。

「…ブラッド・ウアレフォル！出撃する！」

ブラッドの“ブレイズ・ザクファントム”が“モンテスキュー”のカタパルトから吐き出された。彼の後ろにはトーマスの“ゲイツR”やデイトハルト・シースの“ジン”、シラヒ・アメルダの“スラッシュザクウォーリア”が連続して続く。

無論、出撃しているのは彼らだけではない。空母“ゴンドワナ”からも次々とモビルスーツ隊が射出される。そしてザフトのモビルスーツ隊は前方に展開する地球連合軍艦隊へと向かう。

“ザクファントム”の中でブラッドは、シユリアが乗っているであろう戦艦の機影を探すが、それとおもしき戦艦は見当たらない。思わず通信回線を開いて“モンテスキュー”にたずね掛ける。

「…例の戦艦は見つけられたか？」

『前方には確認できません』

しかし、返ってきた返事はブラッドの望みと違うものであった。何となく気に入らないブラッドはしつこく命令を続ける。

「…偵察型ジンを二機出撃させる！辺りを哨戒させておけ！」

ブラッドはそう告げ、目の前で広がる両軍の砲火を見やる。無数のビームやミサイルが飛び交い、数え切れないモビルスーツが輝きに包まれたかと思えば、爆煙にまみれて消え去る。

しばらくはこの雑魚どもで楽しませてもらうとするか。

驟雨の如く浴びせられるビームの雨をブラッドは怯えることなく縫うように泳ぎ回り、無造作に放ったビーム突撃銃の一撃は“ダガーⅠ”の中心を完璧といわんばかりに貫いていた。宇宙空間で無音のまま“ダガーⅠ”は虚しく四散する。

「ナチュラルなど何人いようが、この俺の敵じゃねえんだよ！」

敵陣に切り込んでいくブラッドは叫びながら背部モジュールから“AGM138ファイヤービー誘導ミサイル”を放った。大量に放たれたミサイルは漆黒の宇宙で拡散し、散開していた“ダガー”隊を次々と屠っていく。

超越した動きを持って次々と連合機を撃ち果たしていたのはブラッドだけでは無かった。トーマス達ウアレフォル隊員は勿論のこと、水色のカラーリングにまとめられた“スラッシュ・ザクファントム”。“ガナーウィザード”を装備した見慣れぬ“ザクファントム”もまた、めざましい動きだ。

「…やるじゃねえか。ジュール隊もアルフォート隊もな！」

しかし、連合軍は休む暇なく次々とモビルスーツを送り込んでく

る。いくら機体性能やパイロットが優秀とはいえ、この数の不利はあまりにも大きい。しかし、ブラッドの目は怯えは全く無い。ブラッドは再び機体を振り回して、連合軍艦船へ突っ込んでいった。

さあ、出て来い。“殺戮者”……！！

「プランは予定通りに進行中。作戦承認、本隊は戦闘開始しました。」

作戦は順調に進んでいる。囃である本隊も、エース揃いの“ウアレフォル隊”や“ジュール隊”相手によく奮戦している。“グランデネル”艦橋で艦長席に座していたシユリアは画面の戦闘に目をやりながら、言い放つ。

「ウィンダム隊出撃！」

シュリアの手が下ろされた瞬間、僚艦であるアガムノン級“ネタニヤフ”からは数十機のモビルスーツが吐き出された。

Gat-04 “ウィングダム”。“ダガー”の後継機及び“ギアメット”の簡易型量産機として開発された次世代型モビルスーツ。“ダガー”同様に各種ストライカーパックを装備することによって様々な環境下で戦闘が行える汎用性を重視した機体だ。以前、連合軍によって生み出されたGAT-X105ストライクとほぼ同等のスペックを手に入れた量産型モビルスーツとも言える。

出撃した“ウィングダム”はどの機体にも両肩に巨大なミサイルランチャーが装備されている。しかし、せっかくの次世代型モビルスーツは先導して出撃したエヴァ達“ギアメット”に護衛されるようにして進行する。

が、その理由も“ウィングダム”のミサイルランチャーの側面に記されたマークを見れば明らかであった。先端には“核エネルギー”を示す刻印が刻み込まれている。

開戦とほぼ同時に一気にケリをつける。ただでさえ、“ユニウスセブン”落下で大打撃を受けている地球連合軍だ。長引けばこちらが不利になるのは誰が見ても解る。短期決戦で一気にプラントを叩き、ついで地上でもザフトの主要基地であるオーストラリアのカーペンタリアやヨーロッパのジブラルタルを墜とす。

この一撃が決まればそれで終わる。しかもザフトは囷である本隊にかかりきりになっている。勝った。

シュリアたちは心中でそう呟いた。

闘う者は再び

『地球軍、モビルスーツ隊20。第2エリアへと進行中、第三軍はオレンジ、ベータ15へ…！』

先ほどから入ってくる情報にブラッド・ウアレフォルは若干の苛立ちを感じていた。あれだけの数が出撃しているのにも関わらず、いまだにシユリア・マードたちの艦は見つからないのだ。新たに投入された新型量産機“ウインダム”も大した強さでは無い。所詮はナチュラル如きの操る機体などこんな程度なのだろう。

飽き飽きしてきたブラッドに、喜びの情報が母艦“モンテスキュー”から伝わってきた。

「…例の戦艦を発見！場所は…極軌道だと…?!」

とつさにブラッドは歓喜の笑みを隠せぬまま、送られてきたデータを開いて位置を確認する。しかし、奴らの場所は前線ではなく、プラント極軌道…。つまりは自分達が戦っている場所とはまるで正反對の位置なのだ。

そして、添付されたデータにはもう一つの重要情報が明記されていた。

『核ミサイルコンテナを持った多数の“ウィングダム”を確認。』

と。

なるほどな…ナチュラル共め、姑息なマネを…！

ブラッドは笑みを浮かべながら記載された場所へと向かっていった。暗黙の了解で、トーマスとディートハルト、シラヒもまた前線から離脱して極軌道側へと向かった。

「…来たか！“ギアメット”出る！ハッチ開けてっ！」

シュリアは既に艦橋から席を外し、愛機である“ヒュペリオン・ギアメット”に搭乗したシュリアはモニター越しに『極軌道へ向かってくるモビルスーツ』を確認した。あの“ブレイズ・ザクファン

トム”：間違いなくブラッド・ウアレフォルのものだ。そして、それに追隨している3機もこの間戦ったウアレフォル隊の機体だ。核ミサイル隊の防衛に回っているエヴァたちが危ない。シユリアは急ぐように母艦から出撃し、掩護へと入ろうとする。

が、次の瞬間。後方からの衝撃が彼女を襲い、“ギアメット”は大きく違う軌道へと吹き飛ばされる。

「ッ！！」

「“ゲイツ”：！！」

真紅のカラーリングに染め上げられた“ゲイツR”だ。その腰部レールガンによる攻撃はさいわい“ギアメット”のトランスフェイズ装甲で守りきれたが。

だが、“ゲイツ”の目的はシユリアをただ、別の場所へと移動させたかっただけのようである。

シユリアの目の前には一機の敵モビルスーツ。そして、通信越しにあの男の声が彼女のコックピットに響く。

『久しぶりだな…！シユリア・マード！』

モニター越しに開かれた回線上に映った少年の紅き瞳を見てシユリアは眉をひそめた。

「ブラッド・ウアレフォル……!!」

「シュリア！」

隊長機と思しき“ブレイズ・ザクファントム”と対峙しているシュリアに、エヴァ達が掩護をと向かおうとしたその時、ディートハルトの“ジン”とトーマスの“ゲイツR”が“ギアメット”4機の前へと躍り出た。

『おやおや、君達の相手は僕達です。』

『ブラッド隊長はシュリア・マードとやらと戦いたいみたいなのよ。アンタ達に手出しはさせないわよ。』

ディートハルトが面倒くさそうなポーズを作りながらエヴァ達の

行動を咎め、トーマスは不敵な笑みを浮かべながら状況を説明する。

「3対4よ？こっちの方が有利だし、あとで泣いても知らないからね。」

澄ましたような態度の敵にエヴァが強気の調子で言えば、シラヒは「そりやあ楽しみだぜ」と軽く言い流した。

彼らの目は余裕綽々そのもの。戦うという事に対して、何も躊躇や不安、死への恐怖に怯えてなど居ない。むしろ、『死』よりも『自分達の隊長に怯えている』と言ってもいいだろう。まるで、自分達N・O・Tとは対照的な規律の部隊である。

「お前ら、コイツら腐ってても“ウェアフォル隊”だ、油断はすんなよ…」

焦りのある声でロイが命じ、それに呼応してエヴァ達が通信越しに頷けば、それを確認する間も無くロイは“ワイヤレス・ギアメツト”から“有線式ガンバレル”を解き放った。これら“ガンバレル”は機体から分離して独自の動きを見せて、目標物を様々な方向から狙い撃つ事が可能だ。

それに気づいた敵機もすかさず後退しつつ、戦闘態勢へと移行する。だが、敵は“核ミサイル”を狙う様子は全く無く、“ギアメツト”隊へと真っ直ぐに突っ込んでくる。

プラントを守る気なんてまんざら無いってことか…？

戦いだけをただ楽しんでいるように見えるウアレフォル隊のパイロット達を見てロイは思わず舌打ちした。“プラント”はザフトにとっては守るべき“故郷”^{ふるさと}のはず。こいつらには“帰りたい場所”なんて無いのか。

ロイは哀れにも思いながら、“有線式ガンバレル”での攻撃を続けた。

『…じゃあ、トーマスくん。はじめましょうか？』

“有線式ガンバレル”の攻撃をかわし続けていた最中に、デイトハルトから開かれた通信にトーマスは「了解よ。」と頷く。二機は一旦後退し、前衛をシラヒへ任せた。

とつさに改造“ジン”のバックユニットが開封し、“ゲイツR”の脚部が、ユニットの内部に入るように接続された。同時に“ジン”もメインカメラであるモノアイを通常カラーであるピンクからオレンジへと変化させ、背部の“M1500オルトロス”を構えた体勢に入る。

トーマスのコックピットにも通常とは違う画面が表示される。これはデイトハルトの“ジン”の視界モニターだ。

連結された二機。

そして、“ジン”の長大な砲から放たれた極太の熱線は“ギアメツト”隊の間を駆け抜け、後方に展開していた敵母艦“アンブレラ”の横腹を貫く。

アガムムノン級“アンブレラ”は推進剤を誘爆して爆煙へと包まれた。

「あらあ、すごい！」

トーマスが乾いた歓喜の声を上げる。

出撃前にシュミレーションも軽くやってみたが、まさかこれほどまでの威力とは。旧式の連合戦艦は一撃で葬れるこの威力。

「まあ、こんな所でしょいか。」

「ちょっと、ガキンちゃんが来ちゃうわよ。」

爆発に包まれる戦艦をいつまでも惚れ惚れ見ているディートハルトをトーマスは咎める。既に“ギアメツト”はこちらに迫りつつある。

「連射モードに切り替えます。」

デイトハルトの淡白な声と同時に、“M1500オルトロス”の砲身が180度回転し、新たな銃口が姿を現した。

そして、その砲口からはまたしてもビームが放たれる。

先ほどアガメムノン級を屠ったほどでは無いが、モビルスーツなら一瞬で撃墜されるほどの威力を持ったビームだ。

通常型の“M1500オルトロス”を連射できるようにしたと言えは正しいか。連射されるビームの弾丸は、敵“ギアメット”部隊を牽制するには抜群の威力だ。

“ゲイツR”と連結した“ジン”のウィザードからは長大なビーム砲“M1500オルトロス”による攻撃が雨のように続く。トーマスの“ゲイツR”には他の“ゲイツR”に比べ、装甲を裂き、大容量のエネルギーパックを搭載することによって、長期戦の際の僚機へのエネルギー補給にも使用できるように改良が施されている。よって、通常では大量のエネルギーを使用する大型ビーム兵器でもトーマス機から補給することで、更なる威力の上昇と連射性を加算することが出来るのだ。

「まったく…いつまでも撃ちやがって…あのライフル、弾切れとかね

えのかよ！」

襲い掛かるビームの雨をデブリや小惑星で隠れながら、ロイはうめく。

『情けないね…泣き言、言ってるのかい？』

そんなロイに横からルーシーが耳打ちするようにぼやいた。
ルーシーの言葉にロイは半ば自嘲したように通信を返す。

「バカやろ…遊ばれてるからムカついてるだけだつての！」

決意込めてロイは前へと躍り出る。と同時に再び彼の“ワイヤレス・ギアメット”から“有線式ガンバレル”が飛び放たれ、射撃体勢をとっている“ジン”へ向かった方向からの砲撃を浴びせにかかる。

とっさに合体していた“ジン”“ゲイツR”は散開する。“有線式ガンバレル”に気をとられて一瞬の隙を見せた“ゲイツR”に向かって、エヴァの“コンバット・ギアメット”が襲い掛かり、片手に持った長刀を一閃する。“ゲイツR”はその切っ先をギリギリでかわし、腰部レールガンで応戦しようとする。

時を同じくしてエヴァと共にロイから離れたルーシーとコロンもそれぞれに散開し、攻撃態勢をとった。

「うおおらアッー!!」

狂気染みた叫び声を上げてシラヒはビームアックスを振り下ろす。それに気付いたであろう敵機の“ブースター・ギアメット”はその一閃をかわし、ビームサーベルを引き抜いて、シラヒと激突する。単純に言えば、出力や総重量等の計算等も含めて、“ギアメット”よりやや大型の“ザク”の方がパワーは上だ。シラヒはそのまま、“ブースター・ギアメット”を押し倒す体勢に入る。だが、シラヒの目には、眼前でぶつかり合っている“ブースター・ギアメット”ともう一つ……遠くから狙撃を囑ろうとしている“スナイパー・ギアメット”の姿があった。しかし、“スナイパー・ギアメット”が攻撃を仕掛けてこないのは、もしか味方に当ててしまうことを恐れて躊躇しているのはシラヒにもわかった。

そんな事を考えている奴らに俺は負けるはずが無い。味方は使えるだけ使わなければ。自分以外のすべての味方は利用価値があるのだ。

犠牲なんて考えていれば軍人などやってられないハズなのだ。

そして、その事は常からリーダーも仰られている。

「…バカが！」

ビームアックスを片手持ちに変えて、シラヒは余った左腕でビーム突撃銃を連射する。その目標は“スナイパーギアメット”だ。静止して狙撃体勢を取っていた敵機はとっさに防ごうとするが、ライフルの銃口を撃たれたらしく、持っていたスナイパーライフルを捨てて腰部のビームサーベルを引き抜いてシラヒへ向かって突っ込んでくる。

ちょうど、今戦っている“ブースター・ギアメット”の対角…死角からの攻撃だ。

「…1対2だと…ウアレフォル隊にそんな計算は通じねえんだよオ…！」

シラヒは再び狂気めいた叫び声を上げる。

右手にビームアックス、左手にビームトマホークを持った状態で、“ギアメット”二機の斬劇を真っ向から受け止めたのだ。

『どうしたシュリア！この俺様と戦うことすらできないのか！？』

ブラッドの突きつけるような言葉を振り払うようにシュリアは黙り込んだまま、サーベルで濃緑の“ザク”へと切りかかる。だが、相手は切っ先を完全に先読みしているのか、軽やかに斬撃を回避する。ギリギリなどではない。この間、戦ったときより数段上の強さだ。

以前に戦ったときより、大幅な訓練を重ねたのか…こないだは“力”を十分に発揮していなかったのか。

その答えが後者であることは決定的であった。

“ヒュペリオン・ギアメット”はサーベルをビームライフルに持ち替えて連射するが、“ブレイズ・ザクファントム”は一瞬にして“ヒュペリオン・ギアメット”から離れて機体を翻し、射撃を数回かわしては“ビームトマホーク”を引き抜いてシュリアへと迫る。

しまった！シールドを…！！

シュリアが“アルミューレ・リュミエール”のスイッチに手を触れようとしたがもう遅い。襲い掛かる“ブレイズ・ザクファントム”はすれ違うと同時に“ヒュペリオン・ギアメット”から右腕及び右翼を勢いのまま切り裂いた。

慣性のまま、後方へと抜けていった“ブレイズ・ザクファントム”は振り返ってもう片方の手に持った“ビーム突撃銃”を連射する。あられの様に浴びせられたビームの弾丸は“ヒュペリオン・ギア

メット”のライフルをとらえ、シュリアの眼前でライフルは爆散する。残された武器は“頭部バルカン（トードスシュレッケン）”と“ビームサーベル”だけだ。それに対して敵はまだ無傷。そして勝敗の差ももはや決定的であった。

だが、決意したようにシュリアはビームサーベルを肩から引き抜き、“ブレイズ・ザクファントム”と対峙した。が、その時。

『“時間”か…』

ブラッドの意味深な呟きと同時に、接近しつつあったナスカ級戦艦から巨大な光が宙域を駆け抜けた。

“ニュートロン・スタンピーダー”。一隻のザフト軍ナスカ級が装備していた特殊装備の名前だ。艦首前方に向かって幾重にも羽のようなユニットが重ねあわれ、まるで魚類の鱗のように覆うようにして展開している。この装置によって、核ミサイルは『強制的に自爆』させられたのだ。

ニュートロン・ジャマー・キャンセラー抑止のために開発された兵器で、実戦での使用もこれが始めてである。だが、その効果は絶大であった。

既に地球軍の核攻撃隊は全て壊滅し、予備の核弾頭を持った戦艦やモビルスーツもこの影響で既に自爆している。

「エヴァー！ロイ！ルーシー！コロン！無事か！？」

誰かが破壊された“ネタニヤフ”や他の戦艦に補給に戻っていることは無いだろうか。シュリアは思わず熱紋を確認する前に“ギアメット”隊に通信を入れた。幸いにも皆、すぐに『無事』との音声が入り、シュリアはほっと胸を撫で下ろす。

だが、まだ終わってはいない。

前方から再び迫りかかったブラッドの“ブレイズ・ザクファントム”は“ヒュペリオン・ギアメット”に向かってトマホークを大きく振り下ろした。とつさにサーベルで受け止め、お互いのビーム刃からは火花が迸る。

『もつとだ…もつと強くなれ、シュリア・マード！』

耳打ちしたブラッドの言葉で、シュリアは一瞬、動きを止めた。その隙をすかさずブラッドはトマホークで“ヒュペリオン・ギアメット”の左腕を削ぎ取り、本体を蹴り飛ばして漂っていた隕石へと叩きつける。

コックピットに凄まじいほどの轟音と衝撃が駆け抜け、シュリア

はめまいを覚えたような感覚になる。

『トーマス、シラヒ、デイトハルト、引くぞ。』

そして、冷静に放たれたブラッド言葉に、敵機も彼の意味を確認したように宙域から離脱する。

『今、シュリア・マードを殺せば……わざわざ、お前達と戦う理由も無くなる。』

シュリアが目を閉じた刹那、ブラッドのその言葉だけが、妙に彼女の耳へと残った。

身体が浮き上がるような感覚がする。

私は…死んだのか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1755m/>

機動戦士ガンダム SEED Omicidio

2010年10月10日16時26分発行